“ジュムルーキーヤ”への道（2）

――バッシャール・アル＝アサドによる絶対的指導性の顕現――

青　山　弘　之

「私は地位（manṣib）を求めているのではない。だが，責任を逃れるつもりもない。私は昨日までそう言ってきたし，今日も同じように言おう。なぜなら，地位は目的でなく，目的に至る手段に過ぎないからだ。人民による共和国大統領選出という栄誉を受け，憲法に従い宣誓し執務を任じられた今，この地位に就いた，そう言おう。だが，それによって立場（mawqiʿ）を得たわけではない。すなわち，地位は変わるが，立場は生来変わることがない……。いつの日も変わることのないこの立場とは，人民と祖国への奉仕である。では，私が置かれているこの立場に，地位は何を付け加えるのか……？　地位とは責任であるが，この責任をあらかじめ付与していたものは立場である。地位は正統性を与えると言う者もいる。だが，正統性とは何よりもまず，人民の意志と希望である……。つまり，責任とは人民の利益であり，正統性とは人民の希望と意志であり，地位はこの二つを結びつけ，両者の関係を作り出すものである。そして地位が私の立場に付け加えたものは，諸君の慈愛，信頼，期待，希望という重荷である。」

――バッシャール・アル＝アサド大統領，2001年７月17日 (注1)

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　権力の二層構造
Ⅲ　バッシャール・アル＝アサドの台頭
Ⅳ　ハーフィズ・アル＝アサド前大統領の“最後の遺言”（以上，前号）
Ⅴ　バッシャール・アル＝アサド大統領の施政方針（以下，本号）
Ⅵ　過渡期の権力構造
Ⅶ　改革志向の誇示
Ⅷ　権威主義・独裁の露呈
Ⅸ　結び

2000年７月10日の信任投票で97.293％の信任票を獲得し (注2)，シリアの新大統領に選出されたバッシャール・アル＝アサド（Bashshār al-Asad）は，同月17日，人民議会での就任宣誓に続く施政方針演説でこう述べ，自らの大統領任期を開始した。

本誌前号に掲載した「“ジュムルーキーヤ”への道（１）：バッシャール・アル＝アサド政権の成立」（『現代の中東』第31号，2001年７月，13～37ページ）では，B・アサドが大統領に就任するまでの過程，すなわちハーフィズ・アル＝アサド（Ḥāfiẓ al-Asad）前大統領による“ジュムルーキーヤ”（jumlūkīyah）確立の試みを取り上げた。そして，Ḥ・アサド前大統領の独断的な“遺言”と，絶対的指導性を必要とし続ける支配構造ゆえに，B・アサド大統領が“再生産された独裁者”たることを

運命づけられた，と述べた。

“ジュムルーキーヤ”が権威主義•独裁の維持を究極目標としているという事実は，B・アサド政権だけでなく，息子への権力移譲を画策する共和制下の他のアラブ諸国に二つの困難な課題を提起している。第1に，後継者(息子)は，前任者（父）に勝るとも劣らない卓越した政治手腕をもって絶対的指導性を発揮し，権力の維持に努めねばならない，という課題である。そして第2に，後継者は，“代替わり”を政治・経済・社会における変化の契機とみなしてきた国内の気運に応えるべく，抜本的な改革を断行せねばならない，という課題である。すなわち，“ジュムルーキーヤ”は，権威主義・独裁の維持と，既存の体制を瓦解させる危険性を秘めた改革の実施というジレンマを抱えている。そして，B・アサド大統領の政権運営は，このジレンマがいかに克服されるか，あるいはいかに深刻化するかを見極めるメルクマールをアラブ世界に提供しているのである。

本稿――「バッシャール・アル＝アサドによる絶対的指導性の顕現」――では，B・アサド大統領がこのジレンマのなかでいかなる支配を行っているかを取り上げる。具体的にはⅤ節で，B・アサド大統領の施政方針を分析し，その行間に込められた権威主義・独裁的な性格を解明する。次にⅥ節では，今日のシリアの支配構造がいかに機能しているのかを，Ḥ・アサド前政権の支配構造を踏まえつつ明らかにする。そしてⅦ節とⅧ節では，2000年7月から2001年末にかけて実施された政策のうち，改革志向の誇示をねらった施策と，権威主義・独裁に根ざした強権的措置をそれぞれ取り上げ，B・アサド大統領がいかにして支配強化に努めているのかを論じる。

Ⅴ　バッシャール・アル＝アサド大統領の施政方針

2000年7月17日の就任宣誓をもってシリアの新指導者となったB・アサド大統領は，人民議会と国民に向けて施政方針演説を行った。その内容は，「シリアの近代化，ハイテク化，グローバル化の旗手」としての開明的イメージ，「“古参”(al-ra‘īl al-qadīm）と“新たな血”(al-dimā’ al-jadīdah)の融合」や「腐敗との闘い」といったスローガンによって表現されてきた改革志向，そしてアラブ社会主義バアス党（Ḥizb al-Ba‘th al-‘Arabī al-Ishtirākī）第9回シリア地域大会（mu’tamar quṭrī）で決議された方針を集約したものであった。本節では，これらのスローガンや方針，さらには大統領就任以前のB・アサドの非公式発言を踏まえつつ，施政方針演説の内容を分析する。そして，B・アサド大統領が権力の源泉を何に求めているのかを明らかにする。

B・アサド大統領の施政方針演説は，改革のための理論的基礎と，改革プログラムという二つの部分から構成されている。

施政方針の根幹をなす理論的基礎は，1998年8月の『アル＝ワサト』（*Al-Wasaṭ*）誌とのインタビューでの「メンタリティこそ［変革の－引用者。以下［　］内同じ］基礎である」(al-dhihnīyah hiya al-asās ［lil-taghyīr］)(注3)という発言を掘り下げた内容となっており，改革実行の原動力としての改革精神の確立が強調されている。この改革精神は，以下五つの思考様式・視点からなっている。

⑴ 「創造的思考」(al-fikr al-mubdi‘)ないしは「刷新された思考」(al-fikr al-mutajaddid)：いかなる限界にもとどまらず，いかなる硬直的な枠組みにもとらわれない思考。

⑵ 「客観的視点」(ra’y mawḍū‘ī)に基づく「建設的批判」(al-naqd al-bannā’)：多角的・包括的に問題を分析し，その問題がはらむ積極的側面と消極的側面を見極めたうえで，最善の策を導出すること。

⑶ 「透明性」(shafāfīyah)：自身や社会の弱点，進歩を妨げる習慣，伝統，概念に果敢に対処する姿勢。すべての人々を問題解決に貢献させる方法であり，他者への依存を克服し，自己の責任の認識と遂行を可能にする。

⑷ 「組織的思考」(al-fikr al-mu’assasātī)：すべての組織が，規模や専門分野にかかわらず，祖国を代表しているという認識。他者との協力関係，他者への開放心を支える。

⑸ 「民主主義的思考」(al-fikr al-dīmuqrāṭī)：自身の意見を貫徹する前に他者の意見を受け入れる思考。組織的思考・行動を強化する。この思考に基づく「民主主義的行為」(mumārasāt dīmuqrāṭīyah) は，歴史，文化，文明，そして社会と現実の要請に応じて柔軟になされ，シリアにおいては進歩国民戦線（Al-Jabhah al-Waṭanīyah al-Taqaddumīyah）として結実した[注4]。

このように改革精神を強調したうえで，B・アサド大統領は，「継続のなかの刷新」(al-tajdīd ḍimna al-istimrārīyah)，「安定のなかの発展」(al-taṭwīr ḍimna al-istiqrār) というバアス党シリア地域指導部（Al-Qiyādah al-Quṭrīyah）の言葉を繰り返すかのように，改革実行における「基軸」(miḥwar) として三つの方法を提示している。第１に，既存の問題や困難を解決する場合においても，現状を発展させる場合においても，すべての領域において新たな考え方を提示すること。第２に，現実にそぐわない古い考え方を刷新すること，その際，刷新の余地がなく改革実行の障害となるような無益で古い考え方を放棄する可能性も検討すること。そして第３に，刷新された古い考え方を現代と未来の目的に合わせて発展させること，である[注5]。

一方，改革プログラムについては，バアス党第９回シリア地域大会で決議された方針を反映したかたちで，以下のような政策が提言されている。

⑴ 行政（内政）：①行政・専門職員の能率向上，②不注意，受動的態度，義務不履行の防止による行政制度とその枠組みの改善，③行政の効率化のための責任能力装置の改善。

⑵ 経済：①法の近代化，②国内外の資本の流れを妨げる官僚機構の廃止，③国家・民間資本の導入，④国内外の市場における国営セクターの競争力の向上，⑤資源と支出，輸出と輸入の格差是正，⑥グローバル化によりもたらされる危機に対処するための民間・国営セクターの活性化。

⑶ 外交：①外国，とりわけアラブ諸国との関係強化，②既存のアラブ経済諸会議の活性化，③アラブ統一市場づくりのための絶えまない努力，④アラブの団結を実現するためのアラブ連盟の役割の効率化，⑤「アラブ二国間関係のモデル」である対レバノン関係の強化，⑥民族的最優先事項である占領地の解放と，「戦略的

選択肢」(khiyār istrātījī)としての公正かつ包括的な和平の実現[注6]。

以上，施政方針演説は，その理論的基礎において理想主義的・非現実的であり，またその改革プログラムについても，具体的な実現方法についての言明を欠いた抽象的な目標の羅列に過ぎなかった。しかしこの演説の最大の問題は，“代替わり”を政治・経済・社会における変化の契機とみなしていた国内の気運を裏切る内容を含んでいた点にあった。本稿冒頭で引用した「地位は目的でなく，目的に至る手段に過ぎない……地位は変わるが，立場は生来変わることがない」という発言がそれである。

「人民の利益」や「人民の希望と意志」といった修辞によって彩られていたこの発言は，一読すると，大統領職に対するB・アサド大統領の真摯な姿勢を表現したもののように思える。しかし，権力の二層構造のもとで「地位」と「立場」を解釈すると，彼が権力の源泉を何に求めているのかが改めて明らかになる。

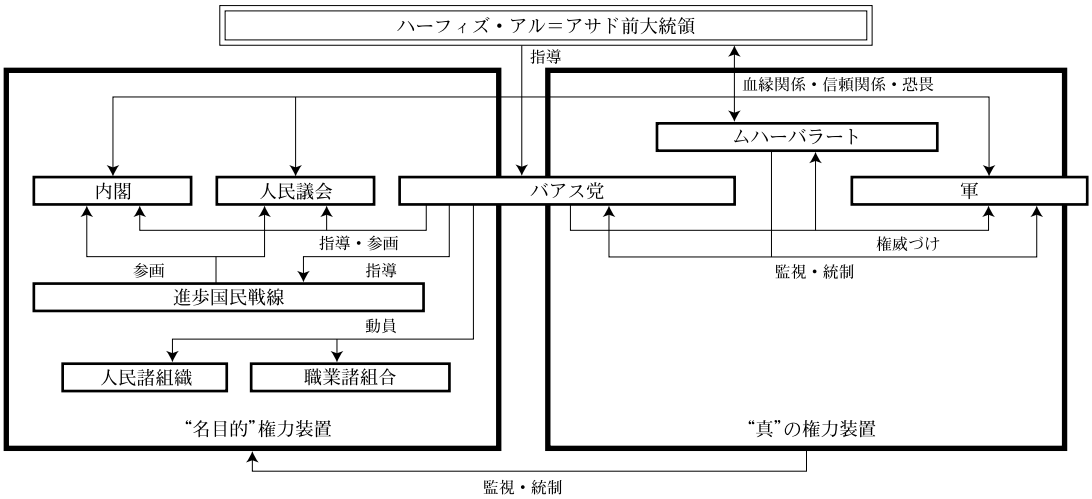
Ⅱ節（前編14〜15ページ）で先述したとおり，権力の二層構造において，大統領職をはじめとする「地位」は，“名目的”権力装置に関わるもので，そこから生じる「目に見える権力」（sulṭah ẓāhirīyah）は何らの実行力も伴わない。なぜなら，今日のシリアを支配するうえでより重要かつ本質的なのは，“真”の権力装置を独断的に駆使し得る「隠された権力」（sulṭah khafīyah）であり，「地位」はこの権力に法的，ないしは“民主的”な体裁を付与するに過ぎないからである。B・アサド大統領が，まず“真”の権力装置のなかで権力移譲を完了し，その後，“名目的”権力装置における公職を確保することで，名実ともにシリアの新指導者に就任したのは，まさにこのためであった。

このような権力構造，さらには権力移譲プロセスを踏まえると，B・アサド大統領が「地位」よりも優先させている「立場」とは，“真”の権力装置を基礎とする「隠された権力」を容易に連想させる。そして，「地位」ではなく「立場」をもって自らのプレゼンスを正統化したことで，彼は父から受け継いだ権力の二層構造のなかで権威主義・独裁の維持・強化を図ることを暗に示した，と理解できるのである。

Ⅵ　過渡期の権力構造

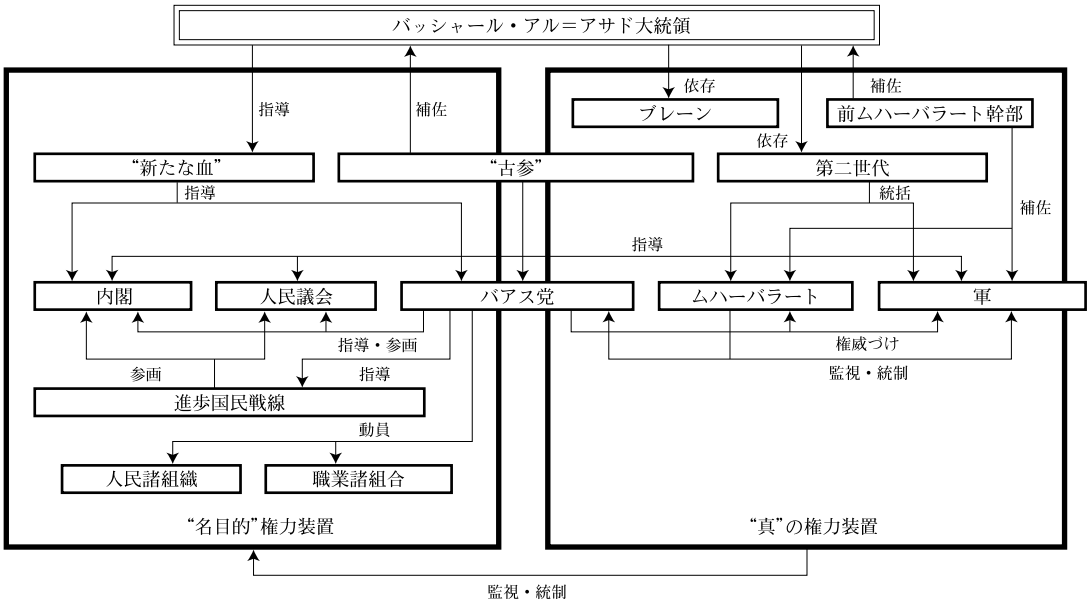
B・アサド政権は，権力の二層構造のもとで「隠された権力」を行使し，権威主義・独裁を維持・強化しようとしている点で前政権と共通している。しかし，Ḥ・アサド前大統領が卓越した政治手腕をもって絶対的指導性を発揮してきたのとは対照的に，政治的経験の浅いB・アサド大統領の支配は，権力装置を構成する諸集団の微妙な権力バランスのうえに成り立っている点で独特である。今日のシリアの権力構造は，政治の表舞台に現れない“真”の権力装置をも包摂しているため，その実態を明確に把握することは困難である。だが，現政権存続のカギは，ブレーン，第二世代，“古参”，“新たな血”，そしてムハーバラート（mukhābarāt）元幹部という五つの集団が握っていると考えられている[注7]。以下，これらの集団の特徴と役割を見ることで，現行のシリアの権力構造がいかに機能しているかを明らかにする（Ḥ・アサド前政権およびB・アサド政権の権力構造の概観については，第2図および第3図を参照）。

第２図　ハーフィズ・アル＝アサド前政権の権力構造



（出所）筆者作成。

第３図　バッシャール・アル＝アサド政権の権力基盤



（出所）筆者作成。

１．ブレーン

ブレーンは，Ｂ・アサド大統領執務室のメンバー５名からなり，政策立案・決定に直接関与していると考えられる。彼らはみなＢ・アサド大統領自身によって抜擢・任命された比較的若いテクノクラートだと言われるが，

いずれも無名で，経歴や担当職務は明らかでない。唯一，氏名•経歴が明らかなのは，バフジャト・スライマーン（Bahjat Sulaymān）である。総合情報部（Idārat al-Mukhābarāt al-ʻĀmmah）内務課（Al-Farʻ al-Dākhilī）長の彼は，1980年代半ばまでリファアト・アル＝アサド（Rifaʻat al-Asad）前副大統領の執務室で務め，その後バースィル•アル＝アサド（Bāsil al-Asad）の側近となった経歴を持ち，治安問題に精通していると見られる[注8]。

ブレーンの存在は，Ḥ・アサド前大統領の政策決定に寄与してきた３名のムハーバラート幹部，すなわち，アリー・ドゥーバー（ʻAlī Dūbā）前軍事情報局（Shuʻbat al-Mukhābarāt al-ʻAskarīyah）長，ムハンマド•アル＝フーリー（Muḥammad al-Khūlī）元空軍情報部（Idārat Mukhābarāt al-Qūwah al-Jawwīyah）長，ムハンマド・ナースィーフ（Muḥammad Nāṣīf）総合情報部内務課次長を想起させる。だが，この３名が前大統領の単なる補佐役に過ぎなかったのとは対照的に[注9]，ブレーンは，B・アサド大統領の政治的経験の不足を補うべく，彼とともに――ないしは，彼に代わって――，国内外のさまざまな懸案に対処する，という大役を担っていると考えられる。

２．第二世代

第二世代は，B・アサド大統領と同世代の軍・ムハーバラート士官からなり，そのなかにはḤ・アサド前政権の中枢を担っていた高官たちの子息が多く含まれている。彼らは，老齢の軍・ムハーバラート幹部に代わって将来，B・アサド政権の強権的な側面を代表することを期待された“予備軍”のような存在である。代表的な人物としては，マーヒル・アル＝アサド（Māhir al-Asad）大佐とアースィフ・シャウカト（Āṣif Shawkat）少将の２名がいる。

Ḥ・アサド前大統領の四男でB・アサド大統領の３歳年下の弟であるマーヒル大佐（1968年，ダマスカス生まれ）は，ダマスカスの自由学院（Maʻhad al-Ḥurrīyah：現在の殉教者バースィル•アル＝アサド学院<Maʻhad al-Shahīd Bāsil al-Asad>）で初等・中等教育を受け，ダマスカス大学でビジネスを専攻した後，軍に入隊し，1997年頃に共和国護衛隊（Al-Ḥaras al-Jumhūrī）に配属された。Ḥ・アサド前大統領死後，B・アサド大統領の後任として共和国護衛隊の実質的な司令官となった彼は，2000年６月のバアス党第９回シリア地域大会で中央委員会（Al-Lajnah al-Marqazīyah）メンバーに選出されるとともに，７月には大佐に昇進し，政治の表舞台にも姿を現すようになっている[注10]。

B・アサド大統領の姉ブシュラー・アル＝アサド（Bushrā al-Asad）の夫シャウカト少将（1950年，タルトゥース生まれ，アラウィー派）は，1968年から1976年までダマスカス大学と同大学院で法律と歴史を学んだ後，軍に入隊した。1980年代にダマスカス大学で薬学を専攻していたブシュラーと知り合った彼は，2人の関係に猛反対するバースィルによってたびたび逮捕・投獄された。だが，バースィルが事故死した翌年の1995年に，B・アサド大統領の後押しもあって，ブシュラーとの結婚を果たし，以後，友人のアリー・アスラーン（ʻAlī Aṣlān）をヒクマト•アル＝シハービー（Ḥikmat al-Shihābī）の後任として参謀総長に推挙するなど，発言力を増していった。現在，

彼は，軍事情報局次長兼武装部隊課（Qism al-Qūwāt al-Musallaḥah）長として同局を実質的に統括するだけでなく，「宮殿護衛隊」（Ḥaras al-Qaṣr）と称される派閥を擁し，軍とムハーバラートの双方において絶大な影響力を持っていると言われている[注11]。

西欧の知識人や外交筋によると，このマーヒル大佐とシャウカト少将に，先述のスライマーン総合情報部内務課長を加えた３名が，「今日のシリアにおける変革に責任を負う……“トロイカ”」だと考えられている[注12]。その改革志向は，2001年７月末に，マーヒル大佐の指導のもと，ラタキア市とカルダーハ（Qardāḥah）村でアサド家の縁者多数が密輸の容疑で摘発され，彼らが違法に建設した港湾施設が閉鎖された際に注目された[注13]。

だが，このような改革志向にもかかわらず，第二世代には，体制内の“腐敗の象徴”というもう一つの顔があり，その横暴ぶりは，たびたび国民の不満や恐怖をかき立ててきた。例えば，マーヒル大佐は，ダマスカスのシェラトン・ホテルでの従兄弟リバール・アル＝アサド（Ribāl al-Asad）との暴力沙汰（1994年10月），マジド・アル＝アサド（Majid al-Asad：1967年生まれ，Ḥ・アサド前大統領の三男）配下の将校の“リンチ”（1999年半ば），シャウカト少将への発砲（1999年10月）など，たびたび事件を起こしてきた[注14]。

Ḥ・アサド前大統領の生前であれば，B・アサド大統領は第二世代の横暴ぶりに「腐敗との闘い」をもって対処することも可能だっただろう[注15]。しかし，彼は，“真”の権力装置において台頭を遂げる彼らの不正行為を黙認しており，そのことが政権に不安材料を投げかけている。

３．“古参”

“古参”は，Ḥ・アサド前大統領に長らく仕え，その死後，バアス党，軍，人民議会においてB・アサド大統領への権力移譲 —— 公職移譲 ——を主導した面々である。彼らは，ムスタファー・トゥラース（Muṣṭafā Ṭulās）国防大臣，アブド・アル＝ハリーム・ハッダーム（‘Abd al-Ḥalīm Khaddām）副大統領，ムハンマド・ズハイル・マシャーリカ（Muḥammad Zuhayr Mashāriqah）副大統領，アブド・アル＝カーディル・カッドゥーラ（‘Abd al-Qādir Qaddūrah）人民議会議長，スライマーン・カッダーフ（Sulaymān Qaddāḥ）地域指導部副書記長，アブド・アッラーフ・アル＝アフマル（‘Abd Allāh al-Aḥmar）地域指導部副書記長らからなる。その任務は，豊富な政治的経験を生かしてB・アサド大統領の支配を支えることにある。

“古参”のなかでもっとも重要な人物は，Ḥ・アサド前大統領のヒムス士官学校時代（1952～1954年）以来の“同志”であるトゥラース国防大臣である。彼は，前大統領の“遺言”に従って，B・アサド大統領への公職移譲を監督した人物であるが[注16]，それ以外にも，大統領の嫁探しに奔走したことで知られている。2001年１月，B・アサド大統領とアスマー・アル＝アフラス（Asmā’ al-Akhras）との「婚姻」（‘aqd al-qirān）が公表されたが，トゥラース国防大臣が少なからず関与したとされるこの結婚は，二つの政治的な意味を持っていた。第１に，英国でコンピュータ科学を専攻したアスマーとの結婚によって，「シリアの近代化，ハイテク化，グローバル化の旗手」としての

B・アサド大統領の開明的イメージの強調がはかられた点である[注17]。そして第2に，ヒムスとアレッポのスンニー派名望家の血を引くアスマーとの縁戚関係を通じて[注18]，Ḥ・アサド前政権時代に権力基盤が弱かったシリア中北部への影響力拡大が試みられた点である[注19]。

しかし，“古参”のなかには，B・アサド大統領の指導に不満を抱いている者が少なからずいると考えられる。その筆頭に挙げられるのがハッダーム副大統領である。B・アサド大統領との不仲がかねてから噂されていた彼は，親しい関係にあるラフィーク・アル＝ハリーリー（Rafīq al-Ḥarīrī）レバノン首相がフランスとシリアの武器取引の仲介に失敗し，政界を追われた1990年後半以降，長らく冷遇されてきた。B・アサド大統領とハッダーム副大統領の対立は，後者が前者への「忠誠を拒んだ」[注20]ことで一気に深まり，2000年6月初めには，「腐敗との闘い」を通じて“粛清”されるとの憶測さえ呼んだ[注21]。しかし，ハッダーム副大統領は，6月末のバアス党第9回シリア地域大会で地域指導部メンバー再任を認められ，また8月5日の進歩国民戦線中央指導部（Al-Qiyādah al-Marqazīyah）会合で副大統領留任も決まり，失脚を免れた[注22]。このような処遇の変化は，B・アサド大統領との不仲にもかかわらず，その外交手腕――とりわけ，対レバノン外交における実務経験と影響力――を必要とされたことによる，というのが一般的な見方である。

ハッダーム前大統領に代表される“古参”内の不満分子は，B・アサド大統領の補佐という重要な任務を帯びている一方で，数十年におよぶ政治生活のなかで獲得した既得権益の保身に躍起だと考えられ（前編20～21ページ参照），現政権の改革志向を損ねる潜在性をはらんでいる。

4．“新たな血”

“新たな血”は，2000年3月のムハンマド・ムスタファー・ミールー（Muḥammad Muṣṭafā Mīrū）内閣発足時にB・アサド大統領に抜擢された閣僚からなり，行政能力や高学歴などを高く評価され，B・アサド大統領が主唱する改革プログラムを実行すべく登用された面々である。代表的な人物としては，ミールー首相，ムハンマド・ナージー・アル＝アトリー（Muḥammad Nājī al-‘Aṭrī）内閣担当副首相，ハーリド・アル＝ラアド（Khālid al-Ra‘d）経済担当副首相，アドナーン・ウムラーン（‘Adnān ‘Umrān）情報大臣，ナビール・アル＝ハティーブ（Nabīl al-Khaṭīb）法務大臣，ハッサーン・リーシャ（Ḥassān Rīshah）高等教育大臣，そしてファールーク・アル＝シャルア（Fārūq al-Shar‘）外務大臣をあげることができる。

抜擢当初，“新たな血”はバアス党内においても政界においても無名であった。だが，バアス党第9回シリア地域大会で地域指導部や中央委員会に参画することで，影響力を強めつつある。彼らは将来的には“古参”にとってかわって，“名目的”権力装置を指導することが予想される。だが，B・アサド大統領就任後，彼らの政治的昇進を促すような人事改編――内閣改造など――は行われておらず，そのことが改革路線の挫折を取りざたさせる結果となっている（“新たな血”の経歴については，前編18～21ページを参照）。

5．ムハーバラート元幹部

ムハーバラート元幹部は，Ḥ・アサド前大統領生前に，“真”の権力装置におけるB・アサド大統領の権力を相対的に強化するために，さまざまなかたちで“排除”されていった3名，すなわち，ドゥーバー前軍事情報局長，フーリー元空軍情報部長，ナースィーフ総合情報部内務課次長をさす。Ḥ・アサド前大統領の政策決定を補佐してきた彼らは，B・アサド大統領就任直後，その“私的顧問”として復職していった(注23)。

ムハーバラート元幹部の復職については，二つの対照的な解釈が可能である。第1に，B・アサド大統領が名実ともにシリアの指導者となった今，かつて“排除”した有力人物――潜在的脅威――さえも動員できるというものである。第2にB・アサド大統領――さらには，ブレーンや第二世代――が，巨大な権力装置であるムハーバラートを統括するだけの才覚をいまだ欠いており，元幹部の助力を必要とした，というものである。いずれの解釈に立ったとしても，ムハーバラート元幹部の復職は，“真”の権力装置におけるヒエラルキーが，B・アサド大統領個人以外への忠誠心を媒体としてなりたっていることを示すものである(注24)。

以上，B・アサド大統領の支配を支える五つの集団の特徴と役割を概略したが，その構成を見ると，現政権の支配体制がいまだ過渡期にあることがわかる。とりわけ，ムハーバラート元幹部の復職と“古参”の残留は，B・アサド政権を頂点とする権力構造が“代替わり”を完了していないということ，言い換えると，B・アサド大統領が父の“威光”に依存し続けていることを示すものである。この点に関して，“左派”(注25)のある知識人・活動家は，次のように述べ，B・アサド大統領を頂点とする権力構造の脆弱さを指摘している。

「新政権は“慣性の法則”に従って動いているに過ぎず，故［Ḥ・アサド］大統領の威光が色褪せれば，いずれ失速するだろう」(注26)。

ブレーン，第二世代，“古参”，“新たな血”，そしてムハーバラート元幹部は，そのいずれもが政権の維持・強化に尽力している点では疑う余地はない。しかし，権威主義・独裁の維持と抜本的改革の断行という“ジュムルーキーヤ”のジレンマは，改革の内容や速度，さらには既存の体制のもとでの既得権益の拡大・保持をめぐって，これらの集団どうしの不協和音を強め，微妙な権力バランスを崩壊させる危険性をはらんでいる。このような事態を回避するためにも，B・アサド大統領は，父に勝るとも劣らぬ政治手腕を身につけ，絶対的指導者としてのプレゼンスを確保する必要に迫られている。

Ⅶ　改革志向の誇示

大統領職の世襲という異例の権力移譲プロセスを経て成立したB・アサド政権は，大統領自身の政治手腕が未知数だったこともあいまって，当初より困難な道のりが予想された。事実，その支配は現在までのところ安定を保

ってはいるものの，権威主義・独裁の維持と抜本的改革の断行という二つの志向の間で，たびたび揺れ動いている。そこで以下，大統領就任（2000年７月）から2001年末までの間に実施された代表的な政策に焦点をあて[注27]，“ジュムルーキーヤ”のジレンマのなかで，B・アサド大統領がいかなる支配を行っているかを明らかにする。具体的には本節で，改革志向の誇示を目的とした二つの政策，すなわち情報部門の改革と恩赦を取り上げ，続くⅧ節で，権威主義・独裁に根ざした強権的措置を精査する。

１．情報部門の改革

情報部門の改革は，B・アサド大統領が「透明性」を実現すべく最初に着手した政策であるが，具体的には大統領賛美の自粛と情報の多元化という二つの施策を中心に進められた。

第１の施策である大統領賛美の自粛は，信任投票の結果が公表された2000年７月11日に，B・アサド大統領が，国家の指導者，とりわけ大統領への過剰な賛美を控えるべき，との意思を国家機関に伝えたことをもって開始された。この意思表明を受け，情報省はただちに，B・アサド大統領とḤ・アサド前大統領を賛美する写真や横断幕の印刷・配布・掲示をとりやめるよう関係当局に口頭および文書で通達し，数日の間に，公的施設と街頭から，装飾――そのなかには，Ḥ・アサド前大統領の死後に飾られたものも含まれていた――が一斉に撤去されていった[注28]。また７月末には，「誇張，神聖化，過大視とは無縁の新たなバランスのとれた情報」[注29]を実現するという目的のもと，ミールー首相が主要情報機関の長を新たに任命し，８月に入ると，今度はウムラーン情報大臣が，SANA（Syrian Arab News Agency：Al-Wikālah al-ʻArabīyah al-Sūrīyah lil-Anbāʾ）と情報省外郭団体の人事を改編した（第７表を参照）。

これら一連の動きは，Ḥ・アサド前大統領治下の個人崇拝の終焉，さらに言うならば，権威主義・独裁体制の改革に向けての第一歩であるかのように思えた。だが実際のところ，情報部門の改革は，前政権とは異なった方法で大統領の権力を誇示するねらいがあったと言えよう。すなわち，Ḥ・アサド前大統領が自身を賛美せざるを得ない状況を創出することで，絶対的な権力を誇示したのとは対照的に[注30]，B・アサド大統領は，国民全体に個人崇拝の自粛を強要することで，指導性を顕示しようとしたと理解できるのである。

第２の施策である情報の多元化は，情報化社会の到来への対応策として試みられたものだと考えられる。衛星テレビ放送の普及やインターネット技術の発展は，国民があらゆる情報を自由に入手することを可能としたが，その結果，あからさまな情報統制は，必ずしも支配の強化をもたらすものではなくなっていた。言い換えると，情報化社会のなかで，政府は，自らにとって好ましくない情報さえも利用し得るような洗練された情報戦略を必要としていたのである。

このような事態に対処すべく，B・アサド政権はまず，「透明性」の原則に従い，外国メディア――とりわけ，外国のアラブ系新聞――への検閲を緩和する一方で，国内のメディア，とりわけ日刊紙の『アル＝サウラ』（*Al-Tharwah*）と『ティシュリーン』（*Tishrīn*）にシリア国内の社会・経済問題を特集させ，「建設的批判」

第7表　2000年7月末から8月初めにかけての情報部門における人事改編

団体・役職	新　任	前　任
放送テレビ協会（Hay'at al-Idhā'ah wa-al-Tilifizyūn）会長	ファーイズ・アル＝サーイグ（Fā'iz al-Ṣāyigh）［SANA会長］	アーディル・ヤーズジー（'Ādil Yazjī）
SANA会長	アリー・アブド・アル＝カリーム（'Alī 'Abd al-Karīm）［SANAカイロ支局長］	ファーイズ・アル＝サーイグ
ダール・アル＝バアス（Dār al-Ba'th）社長	マフディー・ダフル・アッラーフ（Mahdī Dakhl Allāh）	トゥルキー・サクル（Turkī Ṣaqr）*
アル＝ワフダ公社（Mu'assasat al-Waḥdah）社長	マフムード・サラーマ（Maḥmūd Salāmah）	アミード・フーリー（'Amīd Khūlī）
ティシュリーン公社（Mu'assasat Tishrīn）社長	ハルフ・ムハンマド・アル＝ジャラード（Khalf Muḥammad al-Jarād）［研究調査戦略研究所（Markaz al-Dirāsāt wa-al-Buḥūth al-Istrātījīyah）所長］	ムハンマド・ハイル・アル＝ワーディー（Muḥammad Khayr al-Wādī）
SANAカイロ支局長	アドナーン・マフムード（'Adnān Maḥmūd）	アリー・アブド・アル＝カリーム
SANAアルジェリア支局長	フサイン・マンスール（Ḥusayn Manṣūr）	
SANAプラハ支局長	ヤアリブ・イーサー（Ya'rib 'Īsā）	
SANAアンカラ支局長	ナーディヤー・アスアド（Nādiyā As'ad）	
SANAモロッコ支局長	バッサーム・ジャアーラ（Bassām Ja'ārah）	
情報大臣次官外郭団体担当	フアード・バラート（Fu'ād Balāṭ）	
アラブ出版物配給公社（Al-Mu'assasah al-'Arabīyah li-Tawzī' al-Maṭbū'āt）社長	ムハンマド・アル＝ナースーリー（Muḥammad al-Nāṣūrī）	
広告公社（Mu'assasat al-I'lānāt）社長	ターリブ・カーディー（Ṭālib Qāḍī）	

*：イラン大使が内定していたサクルは，2001年初めまでダール・アル＝バアス社長を務めた。
［　］：前職。
（出所）筆者作成。
（資料）*Al-Ḥayāh, August 7, 11, 2000; Al-Sharq al-Awsaṭ*, July 27, 2000.

を奨励した。

このようなメディアの活性化と規制緩和と並行して，B・アサド大統領は，「我々自身の経験を通じて発展を遂げ，我々の政治生活と国民統一において基本的な役割を演じてきた民主主義の一例」(注31) と自賛した進歩国民戦線を動員し，情報の多元化だけでなく，政治の多元化の拡充をめざした。2000年7月末以降，加盟政党の活動促進，「透明性」と法の支配に基づく有識者たち（muthaqqafūn）との対話，「市民社会」（mujtama' madanī）の育成，非常事態令・戒厳令の解除，政党法と出版物法・新聞法の制定などといった問題が，進歩国民戦線中央指導部会合の場で積極的に討論

されていったのである[注32]。その結果，同年10月，すべての加盟政党が全国各地に独自の党事務所を開設することを認められ，戦線の活動促進が図られた。また，翌11月にバアス党シリア地域指導部が加盟政党に機関紙発行を許可したのを受け，2001年に入ると，シリア共産党（Al-Ḥizb al-Shuyūʿī al-Sūrī）ウィサール・ファルハ（Wiṣāl Farḥah）派が『サウト・アル＝シャアブ』（*Ṣawt al-Shaʿb*）を，同ユースフ・ファイサル（Yūsuf Fayṣal）派が『アル＝ヌール』（*Al-Nūr*）を，統一主義社会主義者党（Ḥizb al-Waḥdawīyīn al-Ishtirākīyīn）が『アル＝ワフダウィー』（*Al-Waḥdawī*）を次々と創刊していった。さらに進歩国民戦線加盟政党以外でも，2000年９月に共産党ファルハ派から離反したカドリー・ジャミール（Qadrī Jamīl）派が『カーシユーン』（*Qāsiyūn*）を，アリー・ファルザート（ʿAlī Farzāt）をはじめとする画家たちが風刺雑誌『アル＝ドゥーマリー』（*Al-Dūmarī*）を刊行した[注33]。

こうして，B・アサド政権のもとで，シリアのメディア――そして政治――は，多元的な様相を獲得するにいたった。しかし，非常事態令・戒厳令のもと，表現や出版の自由が依然として制限されている状況において，このような“上から”の改革は，その真の目的を権威主義・独裁の隠蔽に置いていたと見るべきである。とりわけ，機関誌発行に代表される進歩国民戦線の活性化は，体制とは一線を画しつつもその許容範囲を逸脱することのない政治的言説を容認することで，政治の多元化と民主主義が保障されているというイメージを作り上げるねらいがあったものと考えられる。

２．恩赦

政治犯・言論犯への恩赦は，国内で政治・経済・社会における変化への期待が高まるなかで，B・アサド政権の発足直後からその実施がまことしやかに噂されてきた。しかし，2000年７月から10月にかけて，B・アサド大統領は，第８表に示したような小規模な恩赦を実施しただけで，その期待に応えることはなかった。

このような消極的な姿勢は，反政府勢力からの批判をまねいた。国外では，シリア・ムスリム同胞団（Jamāʿat al-Ikhwān al-Muslimīn fī Sūrīyah）が，「バッシャール［・アル＝アサド］大統領がすべての政治犯の恩赦をもって自らの治世を開始することを切望する」[注34]との声明を発表し，恩赦と国外亡命者の帰還を要求した。また次節で詳しく見るように，国内でも，有識者たちが声明発表や会合開催を通じて改革を追求した。

しかし，「矯正運動」（al-ḥarakah al-taṣḥīḥīyah）30周年記念日にあたる2000年11月16日，B・アサド大統領は，政治犯・言論犯600名への恩赦を公式に発表し，変革を期待する国内の気運と反政府勢力の攻勢の双方に応えた。恩赦の対象となったのは，ムスリム同胞団，イスラーム解放党（Ḥizb al-Taḥrīr al-Islāmī），シリア共産党・政治局（Al-Maktab al-Siyāsī），共産主義行動党（Ḥizb al-ʿAmal al-Shuyūʿī），アラブ民主主義社会主義バアス党（Ḥizb al-Baʿth al-ʿArabī al-Dīmuqrāṭī al-Ishtirākī），バアス党民族指導部（Al-Qiyādah al-Qawmīyah，ミシェル・アフラク <Mīshīl ʿAflaq> 派）など，1970年代後半から1980年代初めにかけてḤ・アサド前政

権への抵抗運動を行ったさまざまな潮流の政治組織の活動家・支持者たちで，366名がタドムル（Tadmur）刑務所から，149名がサイドナーヤー（Ṣaydnāyā）刑務所から，そして85名がそのほかの刑務所から釈放された（第９表および第10表）(注35)。

またこの恩赦に続いて，11月22日，B・アサド大統領は法律17号を発令し(注36)，2000年11月16日以前に逮捕された経済犯への恩赦も決定した。さらに翌12月６日には，レバノンのイミール・ラッフード（Imīl Laḥḥūd）大統領の要請に応え，シリアで拘留中のレバノン人政治犯46名とレバノン国籍のパレスチナ人政治犯８名をレバノン当局に引き渡し，12月14日には，拘留中のレバノン人政治犯97名の氏名，逮捕日，罪状，投獄期間をレバノン当局に通達した（第11表および第12表を参照）。

政治犯・言論犯――そして経済犯――への大規模な恩赦は，1990年代以降，Ḥ・アサド前大統領によってたびたび実施されてきており，それ自体，今日のシリアにおいて目新しい出来事ではなかった(注37)。しかし，11月の恩赦は，前政権下とは若干異なったねらいがあったと考えられる。

既発表論文「政治の多元化か独裁の再生産か：1990年代半ば以降のシリアにおける支配の論理」（『現代の中東』第28号，2000年３月，34～48ページ）で明らかにしたとおり，Ḥ・アサド前大統領が1990年代に実施した恩赦は，二つの目的を持っていた。第１に，反政府勢力に対して寛容な姿勢をとることで，支配の安定や“民主的”様相を誇示することである。そして第２に，反政府勢力にある程度の自由な活動を認めることで，権力に挑戦する可能性を秘めた政治的能動分子の潜在力を的確に把握し，先手を打って封じ込め策を講じることである(注38)。

これに対し，11月の恩赦は，シリアの公式筋を通じてその実施が発表されたことからも明らかなように，前政権が30年にわたって一貫して否定し続けてきた政治犯・言論犯の存在を認め，その処遇に真正面から取り組む姿勢を示すことで，B・アサド大統領の改革断行への意欲をアピールするねらいがあったと考えられる。

恩赦によって示された政治改革への意欲に対して，外国のメディアはおおむね高い評価を下した。例えば，11月の恩赦と時をほぼ同じ

第８表　2000年７月から10月にかけての恩赦

年月日	恩赦の対象
2000年７月半ば	共産主義行動党のムスタファー・アルーシュ（Muṣṭafā ʿAlūsh）が15年間の刑期を終え釈放される*。
2000年７月半ば	Ḥ・アサド前大統領の生前の約束に従い，ハーリド・アウド（Khālid ʿAwḍ：自称，12年間服役）らヨルダン人政治犯３名がタドムル刑務所から釈放される。
2000年７月26日	ムスリム同胞団とイスラーム解放党のメンバーを含む政治犯数十名が釈放される。
2000年10月初め	「軍および治安施設への接近を試みた」罪で2000年初めに逮捕されたイスラーム解放党メンバー30名が釈放される。

*：共産主義行動党の２名の指導者，ファーティフ・ジャームース（Fātiḥ Jāmūs）とアスラーン・アブド・アル＝カリーム（Aṣlān ʿAbd al-Karīm）は，Ḥ・アサド前政権下の2000年５月に釈放されていた。
（出所）筆者作成。
（資料）*Al-Ḥayāh*, May 10, July 13, 17, 28, 29, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, July 18, 27, November 2, 2000.

第９表　2000年11月16日の恩赦の対象となった政治犯（組織別内訳）

組　織	恩赦の対象・詳細
ムスリム同胞団	380名――360名がタドムル刑務所から，20名がサイドナーヤー刑務所から――が釈放された。そのほとんどが1970年代末から1980年代初めにかけてḤ・アサド前政権との武装闘争の際に逮捕され，終身刑か死刑を宣告されていた。なお，この恩赦の数週間前に，２名の指導者，ハイサム・カンバーズ（Haytham Qanbāz：求刑死刑）とファイサル•ムバイイド（Fayṣal Mubayyiḍ）も釈放された*1。
イスラーム解放党	「軍および治安施設への接近を試みた」ために2000年初めに逮捕されていたサーミル・フージャ（Sāmir Khūjah）ら80名――50名がタドムル刑務所から，30名がサイドナーヤー刑務所から――が釈放された。
シリア共産党・政治局	ウマル•アル＝ハーイク（‘Umar al-Ḥāyik）がタドムル刑務所から釈放された。
共産主義行動党	22名――５名がタドムル刑務所から，16名がサイドナーヤー刑務所から，ハビーブ•ザウディー（Ḥabīb Zawdī）がそれ以外の刑務所から――が釈放された*2。
アラブ民主主義社会主義バアス党	カリーム•ハルフ（Karīm Khalf）がサイドナーヤー刑務所より釈放された*3。
バアス党民族指導部／アフラク派	30名がサイドナーヤー刑務所より釈放された。そのほとんどが1980年に逮捕され，終身刑か死刑を宣告されていた。
人権協会（Jam‘īyat Ḥuqūq al-Insān）	1992年に逮捕されたムハンマド・ハビーブ（Muḥammad Ḥabīb）とアフィーフ・マズハル（‘Afīf Maẓhar）がアル＝マッザ刑務所から釈放された。
レバノン人	バアス党レバノン地域指導部書記長アースィム•カーンスーフ（‘Āṣim Qānṣūh）によると，レバノンに駐留するシリア軍への敵対的行為，ないしはイスラエルとの協力の罪で投獄されていた24名のレバノン人政治犯が釈放された。
パレスチナ人，ヨルダン人	恩赦の対象とならなかった*4。

* 1：2001年11月半ばに「矯正運動」31周年を記念して実施された恩赦で，イマード•ランクー（‘Imād Rankū：1980年逮捕，懲役20年），マフムード•ウスマーン（Maḥmūd ’Uthmān：1980年逮捕，懲役20年），ハーシム•アル＝マジュズーブ（Hāshim al-Majdhūb：1980年逮捕，懲役20年），ハーリド•アッバース•アル＝シャーミー（Khālid ‘Abbās al-Shāmī：1982年１月７日逮捕，死刑），タリーフ•ハターヒト（Ṭarīf Ḥatāḥit），マシュハル・ムハンマド・ディーブ・ハウワー（Mashhar Muḥammad Dīb Ḥawwā）が釈放された。
* 2：2001年11月半ばに「矯正運動」31周年を記念して実施された恩赦で，アクラム•アル＝ブンニー（Akram al-Bunnī：懲役17年，2004年釈放予定），バフジャト•シャアブー（Bahjat Sa‘būʿ：1992年逮捕，懲役15年），ムハンマド•ミウマール（Muḥammad Mi‘mār：1987年逮捕，懲役15年），ニザール•マールディーニー（Nizār Mārdīnī：1987年逮捕，懲役15年），アドナーン・マフフード（‘Adnan Maḥfūḍ：1987年逮捕，懲役15年），アッバース・アッバース（‘Abbās ‘Abbās：1987年逮捕，懲役15年），ワジーフ・ガーニム（Wajīh Ghānim：1987年逮捕，懲役15年），ラーシド・サトゥーフ（Rāshid Saṭūf：1987年逮捕，懲役15年）ムハンマド・キマール（Muḥammad Qimār：1986年逮捕，懲役15年）が釈放された。しかし，アブド・アル＝アズィーズ・アル＝ハイリー（‘Abd al-‘Azīz al-Khayrī：懲役22年，2014年釈放予定）はいまだ恩赦の対象とはなっていない。
* 3：2001年11月半ばに「矯正運動」31周年を記念して実施された恩赦で，アーディル・イスマーイール（‘Adil Ismā‘īl）が釈放された。
* 4：2001年11月半ばに「矯正運動」31周年を記念して実施された恩赦で，28名のパレスチナ人が釈放された。

（出所）　筆者作成。

（資料）　*Al-Ḥayāh,* November 17, 18, 19, 2000, November 20, 25, 2001; *Al-Nahyār,* November 17, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* November 17, 20, 2000; http://www.shrc.org/arabic/news/600list/intro.htm; http://www.shrc.org/arabic/news/november 2001/releases.htm.

第10表　2000年11月16日の恩赦の対象となった政治犯のうち氏名が明らかとなった者

マフムード・アル＝アイドゥー（Maḥmūd al-‘Aydū）	～・アル＝アスィーリー（al-‘Asīlī）
ハーリド・マウラー・アウド（Khālid Mawlā ‘Awḍ）	～・アッジャージュ（‘Ajjāj）†
～・アル＝アウワー（al-‘Awwā）†	アブド•アル＝ジャッバール•アル＝アティーク（‘Abd al-Jabbār al-‘Atīq）
アフマド・アウワード（Aḥmad ‘Awwād）	アブド・アル＝アズィーズ・アル＝アトゥィー（‘Abd al-‘Azīz al-‘Aṭwī）
～・アクル（‘Aql）	ムスタファー•ムハンマド・アル＝アニース（Muṣṭafā
アブド・アッラーフ・アサーサ（‘Abd Allāh ‘Aṣāṣah）	
バッサーム・アシュラフ（Bassām Ashraf）	

Muḥammad al-Anīs）
ターリブ・シャッハーダ・アバー・ザイド（Ṭālib Shaḥḥādah Abā Zayd）
～・アーブー（ʻĀbū）
アドナーン・アブー・シャファ（ʻAdnān Abū Shafah）
ラドワーン・アブー・アル＝フカラー（Raḍwān Abū al-Fuqarā’）
ラマダーン・アブド・アル＝マジード（Ramaḍān ʻAbd al-Majīd）
アンワール・アル＝アフマド（Anwār al-Aḥmad）
ラーギブ・アル＝アムウーム（Rāghib al-ʻAmʻūm）
ガッサーン・アルーシュ（Ghassān ʻAlūsh）
～・アルマナーズ（Armanāz）
～・アル＝アンダジュ（al-Anḍaj）
マフムード・イーサー（Maḥmūd ʻĪsā）
ジャースィム・ムハンマド・イスマーイール（Jāsim Muḥammad Ismāʻīl）
ハサン・ハーッジュ・イスマーイール（Ḥasan Ḥājj Ismāʻīl）
ヤフヤー・イドリース（Yaḥyā Idrīs）
ターヒル・イブラーヒーム（Ṭāhir Ibrāhīm）
マフムード・イブラーヒーム（Maḥmūd Ibrāhīm）
アンマール・アフマド・ウィザーン（ʻAmmār Aḥmad Wizān）
バシール・アル＝ウスターズ（Bashīr al-Ustādh）
アブド・アル＝サラーム・ウスマーン（ʻAbd al-Salām ʻUthmān）
アブド・アル＝マジード・ウスマーン（ʻAbd al-Majīd ʻUthmān）
サーイル・ウラービー（Thāʼir ʻUrābī）
アブド・アル＝ラッザーク・ウルーブ（ʻAbd al-Razzāq ʻUrūb）
～・ウワイル（ʻUwayr）
～・カイサル（Qayṣar）*1
イスマーイール・アル＝カイサル（Ismāʻīl al-Qayṣar）
ハッサーン・ガザール（Ḥassān Ghazāl）
アブド・アル＝カリーム・カースィム（ʻAbd al-Karīm Qāsim）
ムハンマド・カズムーズ（Muḥammad Qazmūz）
アフマド・カッバーニー（Aḥmad Qabbānī）
ムハンマド・アル＝ガナーシュ（Muḥammad al-Ghanāsh）
ムハンマド・ガーニム（Muḥammad Ghānim）
ワリード・カブスール（Walīd Kabṣūr）
～・カムニヤース（Qamniyās）
アミーン・カルール（Amīn Kalūl）
イヤード・カルール（Iyād Kalūl）
アブド・アル＝ハキーム・ハーリド・カイラーニー・アル＝カンジュ（ʻAbd al-Ḥalīm Khālid Kaylānī al-Kanj）
アイマン・ガンドゥール（Ayman Ghandūr）
～・ガンナーム（Ghannām）
ハイサム・カンバーズ（Haytham Qanbāz）
アブド・アル＝マジード・クタイニー（ʻAbd al-Majīd Quṭaynī）
～・クルト（Qurṭ）
サーリフ・クルビー（Ṣāliḥ Qurbī）
～・アル＝サアディー（al-Saʻdī）
マームーン・アル＝サイイド（Maʼmūn al-Sayyid）
イブラーヒーム・ザイダーニー（Ibrāhīm Zaydānī）
ムンズィル・バドル・サイード（Mundhir Badr Saʻīd）
アフマド・アル＝サイヤーディー（Aḥmad al-Ṣayyādī）
フサイン・アル＝ザイル（Ḥusayn al-Zayr）
アブド・アル＝ファッターフ・アル＝ザイン（ʻAbd al-Fattāḥ al-Zayn）
イサーム・シャリーフ・サウード（ʻIṣām Sharīf Saʻūd）
ズィヤード・ザウバア（Ziyād Zawbaʻah）
サーミフ・サウワーン（Sāmiḥ Ṣawwān）
アフマド・サディーク（Aḥmad Ṣadīq）*2
～・サーフィー（Ṣāfī）*3
～・アル＝サーフィー（al-Ṣāfī）
～・サフユーニー（Ṣahyūnī）
ウマル・ナスーフ・サフルール（ʻUmar Naṣūḥ Saḥlūl）
～・アル＝サムーディー（al-Ṣamūdī）
ジャースィム・アル＝サーリー（Jāsim al-Sārī）
ハマーディー・アル＝サーリフ（Ḥamādī al-Ṣāliḥ）
アフマド・アル＝サーリム（Aḥmad al-Sālim）
アドナーン・シアール（ʻAdnān Shiʻār）
ナイーム・アル＝シアール（Naʻīm al-Shiʻār）
ムハンマド・マフムード・ジャアール（Muḥammad Maḥmūd Jaʻār）
～・シャイフ・アル＝スーク（Shaykh al-Sūq）
ハビーブ・アル＝ジャウダ（Ḥabīb al-Jawdah）
アリー・ジャザーイリー（ʻAlī Jazāʼirī）
アフマド・ムスタファー・アル＝ジャズブ（Aḥmad Muṣṭafā al-Jadhb）
イブラーヒーム・シャッハート（Ibrāhīm Shaḥḥāt）
～・アル＝シャフナ（al-Shaḥnah）
ラヒール・アル＝シャマーリー（Raḥīl al-Shamālī）
～・ジャマール・アル＝ディーン（Jamāl al-Dīn）
マーズィン・シャムスィーン（Māzin Shamsīn）
シャーヒル・シャムート（Shāhir Shamūṭ）
カマール・シャリーク（Kamāl Sharīq）
アッブード・アル＝シャリーフ（ʻAbbūd al-Sharīf）
アブド・アル＝ハーディー・ジャワード（ʻAbd al-Hādī Jawād）
ムスタファー・アリー・シャンマー（Muṣṭafā ʻAlī Shammā）
バフザード・アブド・アル＝ハリーム・ジュムア（Bahzād ʻAbd al-Ḥalīm Jumʻah）
ムンズィル・ジュムア（Mundhir Jumʻah）
ムスタファー・アル＝ジュンディー（Muṣṭafā al-Jundī）
ナイーム・アル＝スィバーイー（Naʻīm al-Sibāʻī）
ビラール・アル＝スィバーイー（Bilāl al-Sibāʻī）

～・スィルハーン（Sirḥān）
アドナーン・アル＝ハーリド・アル＝ズウビー（ʻAdnān al-Khālid al-Zuʻbī）
アリー・アル＝ズウビー（ʻAlī al-Zuʻbī）
イッザト・アル＝ズウビー（ʻIzzat al-Zuʻbī）
イブラーヒーム・アル＝スースィー（Ibrāhīm al-Sūsī）
ムハンマド・スッカル（Muḥammad Shukkar）
アルワーン・アル＝タアマ（ʻAlwān al-Ṭaʻmah）
アドナーン・ダッバーグ（ʻAdnān Dabbāgh）
～・ダッフー（Daḥḥū）
ジルジス・アル＝タッリー（Jirjis al-Ṭallī）
バディーウ・ダッリー（Badīʻ Ḍallī）
～・アル＝ダヒール（al-Dakhīl）*4
ハーリド・タフターファ（Khālid Taftāfah）
ブルハーン・サーイム・アル＝ダフル（Burhān Ṣāʾim al-Dahr）
ハルフ・アル＝ダリージュ（Khalf al-Darīj）
ハリール・アル＝タルファ（Khalīl al-Ṭarfah）
ムフスィン・ナーイス（Muḥsin Nāʻis）
ムフスィン・アル＝ナイーム（Muḥsin al-Naʻīm）
ヤースィル・ナースィル・アル＝ナースィル（Yāsir Nāṣir al-Nāṣir）
ギヤース・ナッジャール（Ghiyāth Najjār）
フサイン・ナッジャール（Ḥusayn Najjār）
アブド・アッラーフ・アル＝ナーディル（ʻAbd Allāh al-Nādir）
サーミル・ニウマート（Thāmir Niʻmāt）
ウマル・アル＝ハーイク（ʻUmar al-Ḥāyik）
アブド・アル＝サミーウ・バイダク（ʻAbd al-Samīʻ Baydaq）
ワリード・アル＝バイラム（Walīd al-Bayram）
ムルシド・ハウワー（Murshid Ḥawwā）
アブド・アル＝ハミード・バクール（ʻAbd al-Ḥamīd Bakūr）
サミール・アル＝ハサン（Samīr al-Ḥasan）
アリー・ハジージュ（ʻAlī Hajīj）
ガッサーン・アル＝バスターミー（Ghassān al-Basṭāmī）
ムハンマド・バダウィー（Muḥammad Badawī）
ファフド・ハターヒト（Fahd Ḥatāḥit）
アフマド・イマーム・アル＝ハティーブ（Aḥmad Imām al-Khaṭīb）
サミーフ・アル＝ハティーブ（Samīḥ al-Khaṭīb）
アブド・アル＝カリーム・ハドル（ʻAbd al-Karīm Khaḍr）
ナアマーン・ハビーブ（Naʻmān Ḥabīb）
アフマド・ハブーシュ（Aḥmad Ḥabūsh）
ウマル・バヤースィー（ʻUmar Bayāsī）
アフマド・フサーム・バラカート（Aḥmad Ḥusām Barakāt）
アブド・アル＝ハミード・バラーズィー（ʻAbd al-Ḥamīd Barāzī）
～・アル＝バラヒー（al-Balakhī）†
ムハンマド・バンダル・アル＝ハーリド（Muḥammad Bandar al-Khālid）
ユースフ・アル＝ハリーリー（Yūsuf al-Ḥarīrī）
ズハイル・ハリールー（Zuhayr Khalīlū）
～・バールーディー（Bārūdī）
バッサーム・アル＝ハルフ（Bassām al-Khalf）
イブラーヒーム・アフマド・ファーディル・ハルユ（Ibrāhīm Aḥmad Fāḍil Ḥaly）
ムティーウ・ハルユ（Muṭīʻ Ḥaly）
～・アル＝ビーク（al-Bīk）
サミール・ビーラクダール（Samīr Bīraqdār）
ファラジュ・ビーラクダール（Faraj Bīraqdār）
イヤード・ヒンダーウィー（Iyād Hindāwī）
サミール・アル＝ファーウーリー（Samīr al-Fāʻūrī）
アブド・アッラーフ・ファーディル（ʻAbd Allāh Fāḍil）
～・フィラーハ（Filāḥah）*5
ウスマーン・アブドゥフ・アル＝ハムド・アル＝フサイニー（ʻUthmān ʻAbduh al-Ḥamd al-Ḥusaynī）
～・フージャ（Khūjah）*6
サーミル・フージャ（Sāmir Khūjah）
ガッサーン・フーミド（Ghassān Ḥūmid）
～・アル＝フーリー（al-Khūlī）
ナズィール・ブルグラ（Nadhīr Burghulah）
ウマル・フルワーニー（ʻUmar Ḥulwānī）
ユースフ・アル＝ブンニー（Yūsuf al-Bunnī）
～・マクドゥーニー（Maqdūnī）
マームーン・ムハンマド・マグムーマ（Maʾmūn Muḥammad Maghmūmah）
タウフィーク・マシュラフ（Tawfīq Mashlaḥ）
～・マスクーン（Maskūn）
ラドワーン・マスブート（Raḍwān Mathbūt）
ズィヤード・マッキーヤ（Ziyād Makkīyah）
ハルドゥーン・ジャミール・マドゥール（Khaldūn Jamīl Madūr）
～・マハーイリー（Maḥāyirī）
サーリフ・アル＝マヒーミード（Ṣāliḥ al-Maḥīmīd）
～・マラカ（Maraqah）
～・マルズーク（Marzūq）
ハーリド・マルハム（Khālid Malḥam）
ヤースィル・マルハム（Yāsir Malḥam）
ハーリド・マルフーム（・カルムーシュ）（Khālid Malḥūm〈Qarmūsh〉）
アイマン・ムハンマド・アリー・アル＝マルムール（Ayman Muḥammad ʻAlī al-Marmūr）
ムハンマド・アブド・アル＝ラフマーン・マンスール（Muḥammad ʻAbd al-Raḥmān Manṣūr）
アーディル・ムーサー（ʻĀdil Mūsā）
アブド・アル＝ラッザーク・ハーッジュ・ムーサー（ʻAbd al-Razzāq Ḥājj Mūsā）
サーミル・ムシャンニン（Sāmir Mushannin）
ターミル・ムシャンニン（Tāmir Mushannin）

ファイサル・ムバイイド（Fayṣal Mubayyiḍ）	アンマール・リズク（‘Ammār Rizq）
アブド・アッラーフ•カラフ•ムハンマド（‘Abd Allāh Qarah Muḥammad）	～・アル＝リバーフ（al-Ribāḥ）*7
～・ヤフヤー（Yaḥyā）	マアーッズ・ムハンマド・ルールー（Ma‘ādhdh Muḥammad Lūlū）
ムハンマド・アル＝ラヒール（Muḥammad al-Raḥīl）	ギヤース・ワーリー（Ghiyāth Wālī）
ハサン・ラマダーン（Ḥasan Ramaḍān）	

＊1：名は，アフマド（Aḥmad），イスマーイール・ムハンマド（Ismā‘īl Muḥammad），ムハンマド（Muḥammad）のいずれか。
＊2：ないしは，アフマド・ムハンマド・サディーカ（Aḥmad Muḥammad Ṣadīqah）。
＊3：名は，アッザーム（‘Azzām）かサミール（Samīr）。
＊4：名は，アブド・アル＝サムド・アター・アッラーフ（‘Abd al-Ṣamd ‘Aṭā Allāh），マルイー・ハサン（Mar‘ī Ḥasan），ムフスィン・ファールーク（Muḥsin Fārūq）のいずれか。
＊5：名は，ムハンマド（Muḥammad）かファイサル（Fayṣal）。
＊6：名は，ウサーマ（Usāmah），アブド・アル＝ジャリール（‘Abd al-Jalīl），ハサン（Ḥasan），アブド・アル＝ハキーム（‘Abd al-Ḥakīm），アブド•アル＝ラフマーン（‘Abd al-Raḥmān），アブドゥフ（‘Abduh），ムハンマド（Muḥammad），マフムード（Maḥmūd）のいずれか。
＊7：名は，ジャマール（Jamāl）かイマード・アブド・アル＝ラティーフ（‘Imād ‘Abd al-Laṭīf）。
†：同姓の政治犯で複数名の釈放が確認されたが，名が不明の者。
（出所）筆者作成。
（資料）*Al-Ḥayāh,* November 17, 18, 19, 2000; *Al-Nahār,* November 17, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* November 17, 20, 2000; http://www.shrc.org/arabic/news/600list/intro.htm.

くして，独立以来，第1級の政治犯を収監してきたダマスカスのアル＝マッザ（Al-Mazzah）刑務所の閉鎖が報じられた際(注39)，日刊紙『アル＝ハヤート』（*Al-Ḥayāh*）は次のような好意的なコラムを掲載した。

「シリア，パレスチナ，レバノン，そしてヨルダンの方言で，『マッザ』は『前菜』を意味する……。［多くの人々が］アル＝マッザ刑務所の閉鎖をアラブにとって政治犯の処遇をめぐる新たな時代の始まりだと考えている」(注40)。

しかしその一方で，「腐敗との闘い」（第13表を参照）や「“古参”と“新たな血”の融合」(注41)など，B・アサドが大統領就任以前に主導してきた改革志向の運動が2000年半ば以降，減速した事実を踏まえると，Ḥ•アサド前政権時代の“タブー”への着手は，国内で高まる変革の気運への対応を迫られたうえでの苦肉の策だったとも解釈できる。すなわち，恩赦，さらには情報部門の改革といった施策は，あくまでも権威主義・独裁を本質とするB・アサド政権の維持・強化を究極目標として行われたに過ぎなかったと言えるのである。

Ⅷ　権威主義・独裁の露呈

B・アサド大統領が実施した初期の政策は，情報部門の改革と恩赦に代表されるように，抜本的な改革断行の意思表示に力点を置いていた。だが，とりわけ2001年2月以降，その支配は強権的な傾向を強めることとなった。この変化は，「市民社会」の確立を呼びかけ反政府運動を展開した国内の有識者たちへの対応のなかにもっとも典型的に現れている。そこで以下，2000年半ばから2001年末にかけて

第11表　2000年12月６日にレバノンに引き渡された政治犯

氏　　名	逮捕年月日	求　刑
ムハンマド・ニザール・ハーリド・アル＝ハッラーク（Muḥammad Nizār Khālid al-Ḥallāq）*	1986年12月15日	終身刑
アリー・アリー・アブー・ダフン（ʻAlī ʻAlī Abū Dahn）*	1987年12月28日	終身刑
ムハンマド・サイード・サイフ・アル＝ディーン（Muḥammad Saʻīd Sayf al-Dīn）*	1989年５月20日	終身刑
ラジャー・サルマーン・カバラーン（Rajā Salmān Qabalān）	1991年６月４日	終身刑
マルワーン・ファヒーム・イッズ・アル＝ディーン（Marwān Fahīm ʻIzz al-Dīn）	1994年２月７日	終身刑
ジャマール・カラーラ（Jamāl Karārah：通称，アブー・ハイサム〈Abū Haytham〉）	1987年６月９日	終身刑
ハサン・サーディク・ワフビー（Ḥasan Ṣādiq Wahbī）	1987年８月29日	終身刑
ナージー・アズィーズ・ハルブ（Nājī ʻAzīz Ḥarb）*	1990年７月20日	終身刑
ジハード・マフムード・ジャマール（Jihād Maḥmūd Jamāl）	1997年５月29日	終身刑
イブラーヒーム・ムハンマド・ハリール・アル＝ハルシー（Ibrāhīm Muḥammad Khalīl al-Ḥarshī）*	1986年７月３日	懲役21年
サイード・アーディル・アル＝ジャルディー（Saʻīd ʻĀdil al-Jardī）*	1996年９月24日	懲役20年
ムーサー・ムハンマド・ムーサー・サアブ（Mūsā Muḥammad Mūsā Ṣaʻb）*	1986年６月21日	懲役20年
イリヤース・シャリーター・アブー・ガスン（Iliyās Shalīṭā Abū Ghaṣn）*	1991年８月18日	懲役20年
イサーム・ウスマーン・ムスタラーフ（ʻIṣām ʻUthmān Mustarāḥ）*	1991年８月18日	懲役20年
ナーシド・ムハンマド・バフジャト・シャーミラ（Nāshid Muḥammad Bahjat Shāmilah）*	1991年８月18日	懲役20年
ジューズィーフ・ジルジス・アビー・ナジュム（Jūzīf Jirjis Abī Najm）	1995年２月24日	懲役20年
ハーリド・マフムード・ヤースィーン（Khālid Maḥmūd Yāsīn）	1994年11月７日	懲役20年
アーマール・アミーン・アル＝ハドリー（Āmāl Amīn al-Khaḍrī）	1993年８月24日	懲役15年
アブド・アル＝ラフマーン・マフムード・アッカーシュ（ʻAbd al-Raḥmān Maḥmūd ʻAkkāshah）*	1986年１月２日	懲役15年
サリーム・フサイン・アウワーダ（Salīm Ḥusayn ʻAwwādah）*	1987年１月23日	懲役15年
ファーディー・シャーヒーン・サイード（Fādī Shāhīn Saʻīd）*	1988年７月11日	懲役15年
ハーリド・ハドル・タウフィーク（Khālid Khaḍr Tawfīq）*	1988年10月19日	懲役15年
フアード・サリーム・アブー・ガーディル（Fuʾād Salīm Abū Ghādir）*	1988年12月28日	懲役15年
サミール・マフムード・ティーバー（Samīr Maḥmūd Ṭībā）*	1991年４月６日	懲役15年
アミール・アミーン・ヤースィーン（Amīr Amīn Yāsīn）	1991年４月８日	懲役15年
ウマル・ムスタファー・フーリー（ʻUmar Muṣṭafā Khūlī）	1991年４月８日	懲役15年
アドナーン・ウマル・サイフ・アル＝ディーン（ʻAdnān ʻUmar Sayf al-Dīn）	1993年11月19日	懲役15年
サミール・アリー・アブー・アル＝ハイル（Samīr ʻAlī Abū al-Khayr）*†	1986年９月22日	懲役15年
ヒクマト・カースィム・バイドゥーン（Ḥikmat Qāsim Bayḍūn）	1994年５月14日	懲役12年
ハサン・ムハンマド・マフディー（Ḥasan Muḥammad Mahdī）	1999年１月11日	懲役12年
ナズィーフ・アフマド・ハーンジー（Nazīh Aḥmad Khānjī）*	1993年11月11日	懲役12年
カースィム・フサイン・バドラーン（Qāsim Ḥusayn Badrān）	1996年７月４日	懲役11年
ワヒーブ・アフマド・アッカーウィー（Wahīb Aḥmad ʻAkkāwī）	1998年10月15日	懲役10年
ラドワーン・シュカイブ・イブラーヒーム（Raḍwān Shukayb Ibrāhīm）	1992年５月２日	懲役10年
イリヤース・ルトゥフ・アッラーフ・ターニユース（Iliyās Luṭf Allāh Ṭāniyūs）	1992年12月21日	懲役10年
ジャミール・ディーブ・ディーブ（Jamīl Dīb Dīb）*	1993年７月７日	懲役10年
ジューズィーフ・アズィーズ・ハリート（Jūzīf ʻAzīz Halīṭ）	1992年11月19日	懲役10年
カーミル・シュカイブ・バワーリーディー（Kāmil Shukayb Bawārīdī）	1994年２月20日	懲役６年
アブド・アル＝ナースィル・ムハンマド・アル＝アスマル・ハマウィー（ʻAbd al-Nāṣir Muḥammad al-Asmar Ḥamawī）*	1997年11月30日	懲役５年

アフマド・ラーファト・ムハンマド・ラシード（Aḥmad Ra'fat Muḥammad Rashīd）*	1999年10月14日	懲役1年半
ムハンマド・ユースフ・アブー・アリー・アル＝タッサ（Muḥammad Yūsuf Abū ʻAlī al-Ṭassah）*	1999年3月30日	未確定
ムニール・フサイン・アフマド（Munīr Ḥusayn Aḥmad）	2000年2月8日	未確定
アリー・ユースフ・ウライビー（ʻAlī Yūsuf ʻUraybī）*	2000年6月26日	未確定
サルマーン・アフマド・ハルーフ（Salmān Aḥmad Khalūf）*	2000年9月16日	未確定
ファールーク・マジード・ジャマール（Fārūq Majīd Jamāl）	1999年8月31日	未確定
ニムル・アティーヤ・アブー・ズィヤーン（Nimr ʻAṭīyah Abū Ziyān）*†	2000年4月1日	未確定
ワーイル・ナースィル・ナースィル（Wā'il Nāṣir Nāṣir）*†	2000年6月4日	未確定
アフマド・ヤースィーン・スィルハーン（Aḥmad Yāsīn Sirḥān）*	2000年7月31日	未確定
アフマド・イブラーヒーム・アブー・ハラジュ（Aḥmad Ibrāhīm Abū Kharaj）*†	2000年7月30日	未確定
アラー・マフムード・アブド・アル＝ラヒーム（ʻAlā' Maḥmūd ʻAbd al-Raḥīm）*†	2000年7月30日	未確定
ラビーウ・タラール・ハサン（Rabīʻ Ṭalāl Ḥasan）*†	2000年7月30日	未確定
アリー・ハサン・ザイダーン（ʻAlī Ḥasan Zaydān）†	2000年7月18日	未確定
アブド・アッラーフ・カーミル・ザイド（ʻAbd Allāh Kāmil Zayd）*†	1999年12月14日	未確定
ユースフ・フサイン・アル＝イーサー（Yūsuf Ḥusayn al-ʻĪsā）	1999年4月3日	未確定

*：身柄引き渡し後，レバノン政府の恩赦により釈放。
†：レバノン国籍のパレスチナ人。
（出所）　筆者作成。
（資料）　*Al-Ḥayāh*, December 13, 16, 17, 19, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, December 16, 19, 20, 2000.

第12表　2000年12月14日にシリアが公表した拘留中のレバノン人逮捕者

フサイン・ムハンマド・アイユーブ（Ḥusayn Muḥammad Ayyūb）
ヤフヤー・ハサン・アウド（Yaḥyā Ḥasan ʻAwḍ）
ハムド・ウマル・アウワーダ（Ḥamd ʻUmar ʻAwwāḍah）
ムフイー・アル＝ディーン・アリー・アサド（Muḥyī al-Dīn ʻAlī Asad）
ターリウ・ムハンマド・アル＝アスカル（Tāliʻ Muḥammad al-ʻAskar）
ワーイル・アフマド・アッカーウィー（Wā'il Aḥmad ʻAkkāwī）
ハーリド・イッズ・アル＝ディーン・アル＝アッス（Khālid ʻIzz al-Dīn al-ʻAss）
ズィヤード・ムハンマド・アッラーム（Ziyād Muḥammad ʻAllām）
ウスマーン・タウフィーク・アティーク（ʻUthmān Tawfīq ʻAtīq）
カースィム・アフマド・アティーヤ（Qāsim Aḥmad ʻAṭīyah）
アーディル・ムスタファー・アル＝アトラシュ（ʻĀdil Muṣṭafā al-Aṭrash）
マルワーン・ムハンマド・アブー・ガイダー（Marwān Muḥammad Abū Ghaydā）
アフマド・イブラーヒーム・アル＝アブド（Aḥmad Ibrāhīm al-ʻAbd）
ハーニー・カリーム・アブド・アッラーフ（Hānī Karīm ʻAbd Allāh）
ワリード・アリー・アブド・アッラーフ（Walīd ʻAlī ʻAbd Allāh）
ムハンマド・アブドゥフ・アブドゥフ（Muḥammad ʻAbduh ʻAbduh）
ユースフ・ハーリド・アル＝アフマド（Yūsuf Khālid al-Aḥmad）
アフマド・アフマド・アムーン（Aḥmad Aḥmad Amūn）
ムハンマド・アフマド・アムーン（Muḥammad Aḥmad Amūn）
ファウワーズ・アブド・アッラーフ・アリー（Fawwāz ʻAbd Allāh ʻAlī）
サーミー・ズィヤード・アールーラ（Sāmī Ziyād ʻĀlūlah）
イーサー・アリー・イーサー（ʻĪsā ʻĀlī ʻĪsā）
ワリード・ラヒーム・イスタファーン（Walīd Raḥīm Iṣṭafān）
ナビール・ウマル・アル＝ウクダ（Nabīl ʻUmar al-ʻUqdah）
スワイダーン・サーリム・アル＝ガーズィー（Suwaydān Sālim al-Ghāzī）
ファーディー・イブラーヒーム・アル＝カーディー（Fādī Ibrāhīm al-Qāḍī）
ナースィル・アリー・カナアーン（Nāṣir ʻAlī Kanaʻān）
ダーウード・ムハンマド・アスアド・アル＝カビール（Dāwūd Muḥammad Asʻad al-Kabīr）
ムハンマド・マフムード・カーンスーフ（Muḥammad Maḥmūd Qānṣūh）
イーフィート・ミシェル・ガントゥース（Īfīt Mīshīl Ghanṭūs）
アリー・アスアド・ガンドゥール（ʻAlī Asʻad Ghandūr）
バドル・アル＝ディーン・アッジャージュ・ガンドゥー

ル（Badr al-Dīn ʻAjjāj Ghandūr）
ムースィーム・バドルース・クーハルヤーン（Mūsīm Badrūs Kūhalyān）
ラッハール•ジャワード•アル＝サアドゥーン（Raḥḥāl Jawād al-Saʻdūn）
ナドゥワ・ハリーフ・アル＝ザイド（Nadwah Khalīf al-Zayd）
ムスタファー・ムーサー・アル＝サイード（Muṣṭafā Mūsā al-Saʻīd）
ファーティマ・アフマド・ザウド（Fāṭimah Aḥmad Zawd）
ナズィーフ•ムハンマド•サルティーフ（Nazīh Muḥammad Salṭīh）
アリー・ワジーフ・ジャアファル（ʻAlī Wajīh Jaʻfar）
ムハンマド•ハサン•ジャアファル（Muḥammad Ḥasan Jaʻfar）
アーミル•ユースフ•ハサン•シャイハーン（ʻĀmir Yūsuf Ḥasan Shayḥān）
アブド・アル＝カリーム・イブラーヒーム・アル＝ジャースィム（ʻAbd al-Karīm Ibrāhīm al-Jāsim）
ファイサル•アリー•シャッハーダ（Fayṣal ʻAlī Shaḥḥādah）
イマード・ムハンマド・ムフタール・シャーティーラー（ʻImād Muḥammad Mukhtār Shāṭīlā）
アリー•ムスタファー•アル＝ジャマール（ʻAlī Muṣṭafā al-Jamāl）
ムハンマド・ナスル・シャンダブ（Muḥammad Naṣr Shandab）
スィハーム•アター•アッラーフ•シュライティフ（Sihām ʻAṭā Allāh Shuraytiḥ）
ムフスィン・ハサン・ダイラーニー（Muḥsin Ḥasan Dayrānī）
タージュ・シャリーフ・アル＝ダニー（Tāj Sharīf al-Danī）
サルキース・アグーブ・ナジャーリーヤーン（Sarkīs Aghūb Najārīyān）
ジャミール・ユースフ・ハウワーシュ（Jamīl Yūsuf Hawwāsh）
タラール•アリー•バグダーディー（Ṭalāl ʻAlī Baghdādī）
アリー•アフマド•アル＝ハック（ʻAlī Aḥmad al-Ḥaqq）
ハッサーン•シャリーフ•ハーッジュ•ハサン（Ḥassān Sharīf Ḥājj Ḥasan）
ムハンマド•ガーズィー•ハーッジュ•ハサン（Muḥammad Ghāzī Ḥājj Ḥasan）
ガッサーン•マフムード•バダウィー（Ghassān Maḥmūd Badawī）
ファーディー・ハムザ・ハートゥーム（Fādī Hamzah Ḥāṭūm）
アフマド•シャーヒル•アル＝ハドル（Aḥmad Shāhir al-Khaḍr）
フサイン・シュカイブ・ハマーダ（Ḥusayn Shukayb Ḥamādah）
ハリール・イブラーヒーム・ハムド（Khalīl Ibrāhīm Ḥamd）
アブド•アル＝ラティーフ•ヒシャーム•ハムード（ʻAbd al-Laṭīf Hishām Ḥamūd）
ムハンマド•ディヤーブ•バヤーン（Muḥammad Diyāb Bayān）
サーミル•ユースフ•バリーシュ（Sāmir Yūsuf Barīsh）
アリー・マルイー・ハーリド（ʻAlī Marʻī Khālid）
サリーム•ムハンマド•ハリーファ（Salīm Muḥammad Khalīfah）
アフマド・ムハンマド・ハリール（Aḥmad Muḥammad Khalīl）
ハドル・ザカリヤー・ハルブ（Khaḍr Zakariyā Ḥarb）
カースィム・アフマド・アル＝ファーウール（Qāsim Aḥmad al-Fāʻūr）
ナビール•アブド•アル＝イラーフ•ファウワーズ（Nabīl ʻAbd al-Ilāh Fawwāz）
サーミル•ターヒル•ファーディル（Sāmir Ṭāhir Fāḍil）
ムハンマド・アフマド・アル＝ファドル（Muḥammad Aḥmad al-Faḍl）
ナスル•アル＝ディーン•カースィム•フサイン（Naṣr al-Dīn Qāsim Ḥusayn）
ムハンマド・ディーブ・ユースフ・アル=ブルジー（Muḥammad Dīb Yūsuf al-Burjī）
ジューズィーフ・アミーン・フワイス（Jūzīf Amīn Khuways）
ハイサム・ハサン・マジャーニーニー（Haytham Ḥasan Majānīnī）
ハリール•ハサン•マジャーニーニー（Khalīl Ḥasan Majānīnī）
アリー•アッバース•マズルーム（ʻAlī ʻAbbās Maẓlūm）
イブラーヒーム•イスマーイール•マフムード（Ibrāhīm Ismāʻīl Maḥmūd）
ムハンマド・フィラース・ヒシャーム・マフムード（Muḥammad Firās Hishām Maḥmūd）
ムハンマド・フサイン・ミクダード（Muḥammad Ḥusayn Miqdād）
アリー•ムハンマド•アル＝ミスリー（ʻAlī Muḥammad al-Miṣrī）
ハサン•アリー•アル＝ミスリー（Ḥasan ʻAlī al-Miṣrī）
ハリーマ•ワディーウ•アル＝ミスリー（Ḥalīmah Wadīʻ al-Miṣrī）
リーファート•ファルハーン•アル＝ミスリー（Ri'fāt Farḥān al-Miṣrī）
イブラーヒーム•アリー•ムーサー（Ibrāhīm ʻAlī Mūsā）
ムハンマド•アフマド•アル＝ムーサウィー（Muḥammad Aḥmad al-Mūsawī）
ハーニー・アブド・アル＝ラフマーン・ムスタファー（Hānī ʻAbd al-Raḥmān Muṣṭafā）

スィハーム・アフマド・ムルタダー（Sihām Aḥmad Murtaḍā）	Ḥawrān al-Rāḍī）
アリー・フサイン・ヤースィーン（ʿAlī Ḥusayn Yāsīn）	ラミーヤー・ハビーブ・ワーキーム（Lamīyā’ Ḥabīb Wākīm）
ムルシド・アフマド・ユーニス（Murshid Aḥmad Yūnis）	シャッハーダ・アスアド・ワフバ（Shaḥḥādah Asʿad Wahbah）
アフマド・スーラーン・ラーディー（Aḥmad Ṣūrān Rāḍī）	アリー・アスアド・ワンヌース（ʿAlī Asʿad Wannūs）
ヒンディーヤ・ハウラーン・アル＝ラーディー（Hindīyah	

（出所）筆者作成。
（資料）*Al-Ḥayāh,* December 15,2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, December 15,2000.

の有識者たちと政府の関係に焦点をあて，B・アサド政権がいかにして，権威主義・独裁的な本質を露呈していったかを明らかにする[注42]。

1．『99人声明』への対応：静観から規制強化へ

「市民社会」の確立をめざす動きは，ミシェル・キールー（Mīshīl Kīlū：作家），リヤード・サイフ（Riyāḍ Sayf：人民議会議員，シリア・アディダス会長），そしてアーリフ・ダリーラ（ʿĀrif Dalīlah：経済学者）という３名の有識者のイニシアチブのもとで，2000年８月頃から本格化していった。B・アサド政権発足に伴う変革の気運を背景に，キールーが「市民社会の友」（Aṣdiqā’ al-Mujtamaʿ al-Madanī）と称する団体の結成準備に入る一方，サイフとダリーラがそれぞれ「国民対話会議」（Muntadā al-Ḥiwār al-Waṭanī）と「火曜経済クラブ」（Nadwat al-Thulathā’al-Iqtiṣādī）の名で会合を主催し，政治・経済・社会における改革を追求するようになったのである。彼らは一元的な組織のもとで活動を展開していた訳ではなかった。だが，国民が政治的・社会的・経済的諸権利を自由に行使し，国家建設と改革の主体として思考・行動し得る社会を「市民社会」と捉え，その実現をめざす点で共通していた。

B・アサド政権は当初，「他者の意見を受け容れる」[注43]という施政方針演説での大統領の言葉に従うかのように，これらの活動を静観した。しかし，９月末に，有識者たちが『99人声明』（*Bayān al-Tisʿ wa-Tisʿīn*）を発表すると，態度を豹変させた。この声明で彼らは，民主主義と人権を人類普遍の概念とし，国家建設・発展のために国民が参加し得る社会を「市民社会」と位置づけたうえで，以下３項目をB・アサド大統領に要求した。⑴非常事態令と戒厳令の解除，⑵すべての政治犯・言論犯への恩赦と国外亡命者・追放者の帰国許可，⑶法治国家の実現，一般的諸自由の保障，政治的・思想的多元主義の確立，集会・報道・表現の自由の保障，公的生活の法律による束縛の廃止，検閲・監視の廃止，である[注44]。

キールー，アントゥーン・アル＝マクディスィー（Anṭūn al-Maqdisī：哲学者），ハッサーン・アッバース（Ḥassān ʿAbbās：研究者），ブルハーン・ガルユーン（Burhān Ghalyūn：思想家），サーディク・ジャラール・アル＝アズム（Ṣādiq Jalāl al-ʿAẓm：思想家），ナビール・スライマーン（Nabīl Sulaymān：小説家）など，シリアを代表する99名の有識者たちの連名で発表された声明は，その動員力だけをとってみても，B・アサド政権にとって非常に大きな脅威であった。しかも，進歩国民戦線の活動促進，非常事態令・戒厳令の解除，政党法

第13表　B・アサド政権下での主な「腐敗との闘い」

年月日	摘発された事件
2000年７月末	ムハンマド・アブー・アル＝ナスル（Muḥammad Abū al-Naṣr）社長をはじめとする工業銀行（Al-Maṣraf al-Ṣinā‘ī）幹部が，架空の債権の取引と贈収賄の疑いで起訴される。
2000年11月初め	農業銀行幹部――ナィーム・ジュムア（Na‘īm Jum‘ah：社長），ターハー・ナッサール・アル＝サラーフ（Ṭāhā Naṣṣār al-Ṣalāḥ），マフムード・ムハンマド・アル＝ナーシフ　(Maḥmūd Muḥammad al-Nāshif)，ムハンマド・サーリフ・アル＝ラーウィー（Muḥammad Ṣāliḥ al-Rāwī），ムスタファー・イスマーイール・アル＝ダワー（Muṣṭafā Ismā‘īl al-Dawā），イーサー・サーリー・アル＝ジルド（‘Īsā Sārī al-Jild)，シャッラーシュ・アッズー・アル＝ナースィル（Shallāsh ‘Azzū al-Nāṣir）――とその家族の動産・不動産1360億シリア・ポンド（約276万米ドル）相当が差し押さえられる。
2001年１月29日	カッドゥーラ人民議会議長は，人民議会議員３名――ムスタファー・アル＝アーイド（Muṣṭafā al-‘Āyid：農民総連合総裁），ラフィーク・ダルウィーシュ（Rafīq Darwīsh），ムハンマド・マイフーブ（Muḥammad Mayhūb：同連合執行部）――の公金横領と贈収賄をめぐる取り調べを経済安全裁判所に許可する。また，司法当局は，これら３名とともに，ムアーウィヤ・アブド・アル＝ワーヒド（Mu‘āwiyah ‘Abd al-Wāḥid）の取り調べも決定する。
2001年７月末	B・アサド大統領は，マーヒル大佐に命じ，ラタキアとカルダーハでアサド家の縁者多数の不正を摘発するとともに，彼らが密輸のために不法に建設・使用してきた港湾施設を閉鎖する。

（出所）　筆者作成。

（資料）　*Al-Ḥayāh,* July 28, August 3, 2000, January 30, July 27, 2001; *Al-Sharq al-Awsaṭ*, July 30, 2000, January 31, 2001; *Tishrīn,* November 8, 2000を参照。

と出版物法・新聞法の制定などといった問題がいまだ審議段階にあり，自らの改革志向を十分に誇示していなかったB・アサド大統領は，この声明によって改革の遅れを露呈しただけでなく，明らかに守勢に立たされたのである。

こうして改革の主導権を奪われたB・アサド政権は，ムハーバラートによる尋問や監視を通じて『99人声明』の署名者たちを抑えつけることで，ハッダーム副大統領が言うところの「クーデタ行為」(注45) に対処した。そして，このような強権的な措置によって，B・アサドは大統領就任後初めて，あからさまに自らの全体主義的なありようを示したのである。

２．『基本文書』への対応：「積極的中立」

「市民社会」の確立をめざす有識者たちは，ムハーバラートによる規制強化を前に沈黙を余儀なくされたかに思えた。しかし，『99人声明』発表から３カ月後の2001年１月12日，彼らは『基本文書』（*Al-Wathīqah al-Asāsīyah*）を発表することで活動を再開した。

1000名を上回る有識者，公務員，専門職業人らが署名したこの文書は，これまで以上に強い調子でB・アサド政権の全体主義的性格を批判し，以下８項目を要求した。⑴非常事態令，戒厳令，そしてそれらに関わるすべての法律・裁定・法廷の廃止，すべての政治犯の釈放と国外追放者・亡命者の帰国許可，⑵政治的諸権利の保障，市民生活と政治生活の法制化，⑶出版物法の施行，⑷民主的な選挙法の制定，⑸司法の独立と清廉さの実現，⑹憲法が明記する経済権の履行，⑺進歩国民戦線主導型の政治体制とバアス党の指導的役割の再検討，⑻女性差別の廃止。また，この文書において，有識者たちは，「市民社会再生諸委員

会」(Lijān Iḥyā' al-Mujtama' al-Madanī)の設立を呼びかけ,実践を通じて「市民社会」の確立をめざす意志を表明した(注46)。

『基本文書』の内容に従い,キールー,ダリーラ,アズム,アブド・アル＝ラッザーク・イード(‘Abd al-Razzāq ‘Īd:研究者,評論家),ジャーッド・アル＝カリーム・ジャバーイー(Jādd al-Karīm Jabā‘ī:作家,研究者)ら16名が,「結成委員会」(Al-Hay'ah al-Ta'sīsīyah)(注47)を発足し,その下部組織として「学問・研究委員会」(Lajnat al-Dirāsāt wa-al-Buḥūth)(注48),「消費者権利協会」(Jam‘īyat Ḥuqūq al-Mustahlik)(注49),そして「文化会議」(Muntadā Thaqāfī)を設置するという合意を行った。そして1月15日に,スライマーン,イード,ジャバーイーがラタキアで「文化クラブ」(Al-Nadwah al-Thaqāfīyah)を開催したのを皮切りに,「ヒムス対話会議」(Muntadā Ḥimṣ lil-Ḥiwār),「バーニヤース文化会議」(Muntadā Bāniyās al-Thaqāfī),「スウェイダー文化会議」(Muntadā al-Suwaydā' al-Thaqāfī),「文化的対話のためのハサカ会議」(Muntadā al-Ḥasakah lil-Ḥiwār al-Thaqāfī),「ジャッラーダト・バドルハーン文化会議」(Muntadā Jalldādat Badrkhdān al-Thaqāfī:カーミシリー)など,20に及ぶ「文化会議」が次々に発足した。

『99人声明』発表時とは対照的に,B・アサド政権は,キールーが言うところの「積極的対応」――ないしは「積極的中立」(ḥiyād ījābī)――(注50)をとり,『基本文書』が国内で配布されることに何らの規制も加えず,またムハーバラートによる監視・尋問を行うこともなかった。このような穏健な対応は,『99人声明』発表から『基本文書』発表にいたる3カ月の間に,前節で取り上げた一連の施策を通じて,B・アサド政権が改革志向を誇示したことで可能になったと考えられる。すなわち,情報や政治の多元化の試み,さらには恩赦を通じて改革の主導権を回復したB・アサド政権は,有識者たちの活動が自らの改革プログラムの枠内で展開されているに過ぎないというイメージを作るべく,あえて「積極的中立」という態度をとったのである。

3.弾圧の強化

「積極的中立」は,B・アサド大統領が政治の多元化に向けて本格的に動き出す前兆であるかのように思えた。だが,2001年1月末に有識者どうしの間で,主導権争いや運動方針をめぐる路線対立が露呈すると(注51),政府は再び,彼らの活動への規制を強化していった。1月29日にウムラーン情報大臣がプレス・コンファレンスで「市民社会」の確立をめざす一連の動きを「市民社会とは無関係で……社会統合に抵触する」(注52)と非難したのを皮切りに,当局は『アル＝サウラ』や『ティシュリーン』を通じて有識者たちの活動を非難していった。そして2月半ばに,政治治安部(Idārat al-Amn al-Siyāsī)は,各地の「文化会議」開催に関して以下五つの条件を設け,有識者たちの活動を制限したのである。⑴会議開催の2週間前までに開催許可申請を行う,⑵講演者を招聘するための許可申請を行う,⑶出席者の氏名を告知する,⑷討論内容の概要を告知する,⑸開催日時・場所を告知する。

この決定に基づき,2月15日には「ヒムス対話会議」が,16日には「バーニヤース文化会議」が,17日には「市民社会」についての討議を予定していたアレッポの「骨董品協

会」（Jam'īyat al-'Ādiyāt）が，そして18日には「スウェイダー文化会議」,「文化的対話のためのハサカ会議」,「ジャッラーダト・バドルハーン文化会議」が次々と閉鎖されていった[注53]。また，1月31日の「国民対話会議」で，「社会平和運動」（Ḥarakat al-Silm al-Ijtimā'ī）の結成を呼びかけ,「結成委員会」と一線を画すようになったサイフも，その活動を違憲とみなされ起訴されるなど，当局によるあからさまな嫌がらせを受け，3月21日に活動の断念を宣言し，挫折した。

当局による規制再強化に伴い，有識者たちの運動は大きな困難に直面した。しかし，彼らは活動を断念することなく，今度は国民民主主義連合（Al-Tajammu' al-Waṭanī al-Dīmuqrāṭī）のイニシアチブのもとで，B・アサド政権への対決姿勢を強めていった。

国民民主主義連合は，1980年1月に結成された反政府系の政治同盟で，アラブ社会主義連合（Al-Ittiḥād al-Ishtirākī al-'Arabī）ジャマール・アル＝アタースィー（Jamāl al-Atāsī）派，アラブ民主主義社会主義バアス党，共産主義行動党，アラブ社会主義者運動（Ḥarakat al-Ishtirākīyīn al-'Arab）アクラム・アル＝ハウラーニー（Akram al-Ḥawrānī）派，シリア共産党・政治局，革命労働者党（Ḥizb al-'Ummāl al-Thawrī）といった“左派”の組織から構成されている。同連合は，1980年初めに指導者・活動家のほとんどが逮捕・摘発されて以降，長らく低迷を続け，サラーフ・ジャディード（Ṣalāḥ Jadīd：1993年に獄中死），ハウラーニー（1996年に亡命先のヨルダンで死去），J・アタースィー書記長（2000年4月に死去）といった主だった指導者が相次いで世を去ったことで，組織としての機能も麻痺していた[注54]。だが，J・アタースィーの後任として書記長に就任したハサン・アブド・アル＝アズィーム（Ḥasan 'Abd al-'Aẓīm），ハビーブ・イーサー（Ḥabīb 'Īsā：連合スポークスマン，弁護士），そしてサッラーブ・ジャマール・アル＝アタースィー（Sarrāb Jamāl al-Atāsī：J・アタースィーの娘，研究者）の指導のもと，2001年2月初めに「民主的対話のためのジャマール・アル=アタースィー会議」（Muntadā Jamāl al-Atāsī lil-Ḥiwār al-Dīmuqrāṭī）を発足し，活動を再開したのである。

「民主的対話のためのジャマール・アル＝アタースィー会議」は――「文化会議」と同様に――4月29日に閉鎖処分を受けたが，その後も当局の命令を無視して活動を継続した。Ḥ・アサド前大統領の一回忌を間近に控えた6月3日に断行された会議では，アッバースが「シリアにおけるジャーナリズムの現状」（Wāqi' al-Ṣaḥāfah al-Sūrīyah）と題した講演を行い，バアス党によるメディア支配・独占と情報統制を厳しく批判したのである[注55]。

有識者たちによるこのような抵抗運動は，8月5日にダマスカスで開催された「民主的対話のためのジャマール・アル＝アタースィー会議」で，リヤード・アル＝トゥルク（Riyāḍ al-Turk）シリア共産党・政治局書記長が，200人を超える出席者を前に，今日のシリアの政治体制を酷評するにいたり，頂点に達した。

「シリアにおける民主主義の道のりとその行方」（Masār al-Dīmuqrāṭīyah wa-Āfāq-hā fī Sūrīyah）と題された講演のなかで，トゥルクは，Ḥ・アサド前政権とB・アサド政権の双方を「専政」（istibdādīyah），「権威主義」（tasalluṭīyah），「全体主義」（shumūlīyah）といった言葉をもって攻撃した。シリアの政治史を振り返るなか

で，Ḥ・アサド前大統領の支配を「体制の私物化」(shakhṣanat al-niẓām) と特徴づけた彼は，前政権が，国民の財産を奪い，抑圧・逮捕・国外追放・殺害といった暴力的手段に訴え，恐怖心を煽ることで，権力の維持を図ってきたと批判した。また，B・アサド大統領就任によって，シリアの支配体制が人民の意志を無視した「世襲共和制」(al-niẓām al-jumhūrī al-wirāthī) に変貌したと述べたうえで，既得権益の保身をめざす勢力を包摂する現政権は抜本的改革を実現できない，と断言した。そして，シリアにおける改革の本質が「専政・権威主義から民主主義への移行」(al-intiqāl min ḥālat al-istibdād aw al-tasalluṭ ilā al-dīmuqrāṭīyah) にあるとし，その実現には何よりまず，すべての反政府勢力の糾合と包括的な民主化の強調が不可欠だと結論づけた[注56]。

17年7カ月におよぶ投獄・拷問（1980年10月28日～1998年5月30日）にもかかわらず抵抗運動を断念することなく，支持者たちから「生ける殉教者」(shahīd ḥayy) と呼び称えられてきた“抵抗運動のシンボル”，トゥルクの体制批判は，有識者たちを非妥協的な反政府運動へと導き得るだけのインパクトをもっていた。事実，トゥルクの講演の2日後にあたる8月7日，非常事態令・戒厳令の解除と，ムハーバラートによる抑圧の撤廃を求め，ムハンマド・マームーン・アル＝ヒムスィー（Muḥammad Maʾmūn al-Ḥimsī：人民議会議員）がハンストを開始し，また同9日に彼が逮捕されると[注57]，B・アサド政権の恐怖政治を非難する声が有識者たちから一気に噴出したのである[注58]。

事態を憂慮したB・アサド政権は態度を硬化させ，弾圧を通じて事態の収拾を図った。当局はまず，国内に恐怖心を煽るべく，政府に対する有識者の敵意を代弁した“抵抗運動のシンボル”，トゥルクに照準を定めた。8月31日，塞柱症によって片腕が麻痺したトゥルクは，翌9月1日，診察を受けるため地中海岸の都市タルトゥースの病院を訪れた。だが，当局はその場で彼の身柄を拘束し，「共和国大統領の正統性を疑い，その地位を非難した」罪で逮捕・投獄したのである[注59]。

“抵抗運動のシンボル”の摘発を受け，シリアの反政府勢力は一斉に抗議行動に出た。国外ではムスリム同胞団やシリア人権擁護諸委員会(Lijān al-Difāʿ ʿan Ḥuqūq al-Insān fī Sūrīyah) が政府の措置を激しく批判する一方で，国内でも，9月5日に，サイフが当局の命令を無視して「国民対話会議」を再開し[注60]，また9日にも，国民民主主義連合が「民主的対話のためのジャマール・アル＝アタースィー会議」を断行した[注61]。しかし，政府が弾圧の手を緩めることはなかった。9月6日，「国民対話会議」を再開したサイフを「法律違反」の罪で逮捕したのを皮切りに[注62]，当局は同会議に出席したワリード・アル＝ブンニー（Walīd al-Bunnī：医師）とカマール・ルブワーニー(Kamāl Lubwānī：医師)を8日に，そして，ダリーラ，ハビーブ・サーリフ(Ḥabīb Ṣāliḥ：事業家)，ハサン・サアドゥーン（Ḥasan Saʿdūn：教師）を9日に逮捕した。また12日にも，「民主化のためのジャマール・アル＝アタースィー会議」を主催した国民民主主義連合メンバー2名，すなわちイーサー[注63]とファウワーズ・タルルー（Fawwāz Tallū）を逮捕した[注64]。

2001年8月から9月にかけての弾圧は，『99人声明』発表時の規制強化とは異なった動機に基づいていたと考えられる。すなわち，『99人声明』発表直後の有識者への対応が，政治

改革のための実務的ステップを十分に踏み出していなかった政権側の守勢として理解できるのに対し，トゥルク，サイフ，ダリーラら10名の逮捕は，改革志向の誇示にある程度の成功を収めたB・アサド大統領が，かねてから指摘されてきた“軟弱さ”を払拭し，国内に“恐畏”の念を喚起することで，絶対的指導性を顕示する，という積極的動きだったと考えられるのである。

Ⅸ　結び

「雄弁は銀，沈黙は金ならば，行動はダイアモンド／急務である」（idhā kān al-kalām min al-fiḍḍah wa-al-sukūt min al-dhahab, fa-al-ʻamal min almās/al-māss）(注65)。

2000年6月20日，大統領信任投票を間近に控えたB・アサドは，バアス党第9回シリア地域大会閉会式でこのように述べた。この発言がなされた当初,「行動」は，変革への楽観的な期待もあいまって，改革の実践として理解された。しかし，政権発足後1年半を通じて，B・アサド大統領がとった「行動」のなかで，支配の維持・強化を行ううえでもっとも有効に機能したのが，反対分子の逮捕という暴力的措置であった。

“ジュムルーキーヤ”のジレンマのなかで，B・アサド大統領にはおそらく二つの選択肢が用意されていたはずである。一つは，暴力をもって絶対的指導性を顕現し，権威主義・独裁的本質を隠蔽するために名ばかりの改革に終始することである。もう一つは，自らの支配を崩壊させる危険性をはらんだ抜本的な改革事業に着手し，独自の指導性を発揮することである。言うまでもなく，B・アサド大統領が選んだのは第1の選択肢であり，とりわけ「市民社会」の確立をめざす国内の有識者たちを力で抑え込むことで,“再生産された独裁者”たることを自明のものとした。それだけでなく，B・アサド政権によるあからさまな強権発動は，反対勢力への暴力の行使によって政権維持が図られてきた1980年代へとシリアを逆行させる行為だったといっても過言ではない。既発表論文「政治の多元化か独裁の再生産か」で論じたとおり，晩年のḤ・アサド前大統領による支配は，反政府運動指導者への恩赦を実現し得るほどの安定を確保していた(注66)。しかし，B・アサド政権は，有識者たちの逮捕をもって，前政権が享受したこの安定がもはや存在しないことを示したのである。

こうして権威主義・独裁の恐怖のもとに再び置かれることとなったシリアが，かつてのような「暴力の悪循環」，すなわち，体制による弾圧と反政府勢力による抵抗の応酬のなかで，政治，経済，社会といったすべての領域において挫折を繰り返すか否かを，現時点で明言することはできない。しかし，シリアにおける変革を疎外する最大の要因が,“ジュムルーキーヤ”確立によって永続化されようとしている権威主義・独裁にあることは疑う余地がない。

（2001年12月25日脱稿）

（注1）　*Al-Baʻth* (Damascus), July 18, 2000.

（注2）　大統領信任投票の結果については, *Al-Baʻth,* July 12, 2000; *Al-Ḥayāh* (London), July 12, 2000;

Al-Sharq al-Awsaṭ (London), July 12, 2000; *Al-Thawrah* (Damascus), July 12, 2000; *Tishrīn* (Damascus), July 12, 2000を参照。

（注３） “Fī Ḥiwār Shāmil maʻa al-Ḥayāh, Bashshār al-Asad: Al-Tafāʾul bi-al-Salām lā Yaʻnī al-Harwalah［『アル＝ハヤート』紙との包括的な対話のなかで，バッシャール・アル＝アサド：和平への楽観は性急さを意味しない］,” *Al-Wasaṭ*, No. 295, August 23, 1999, p. 12.

（注４） *Al-Baʻth,* July 18, 2000.

（注５） *Al-Baʻth,* July 18, 2000.

（注６） *Al-Baʻth,* July 18, 2000. バアス党第９回シリア地域大会で決議された党方針については，Aoyama Hiroyuki, *History Does Not Repeat Itself (Or Does It?!): The Political Changes in Syria after Ḥāfiẓ al-Asad's Death* (M.E.S. Series No. 50,Chiba: Institute of Developing Economies-JETRO, 2001), pp. 53, 57ff. を参照。また，大統領就任以前にメディアを通じて明らかにされたＢ・アサドの政策ヴィジョン，とりわけ外交方針については，*Al-Sharq al-Awsaṭ*, June 11, 12, 2000を参照。

（注７） Interview, Anonymous, Damascus, June 19, 2000.

（注８） Interview, Anonymous, Damascus, June 19, 2000. 1998年７月のバシール・アル＝ナッジャール (Bashīr al-Najjār) 解任によって，マフムード・シャッカ (Maḥmūd Shaqqah) が総合情報部長に就任したと報じられたが，実際には，1999年４月に同内務課長に就任したと考えられていたアリー・アル＝フーリー（ʻAlī al-Ḥūrī）が部長に任命されていた。http://www.meib.org/articles/0007_s3htm を参照。

（注９） 前政権がḤ・アサド前大統領個人に多くを依存してきた事実については，Patrick Seale, *Asad of Syria: The Struggle for the Middle East,* London, I.B. Tauris, 1988, p. 494などを参照。

（注10） *Al-Baʻth,* June 21, 2000; http://www.meib.org/articles/0008_sd1.htm.

（注11） Interview, Anonymous, Damascus, June 19, 2000; http://www.meib.org/articles/0007_sd1.htm; http://www.meib.org/articles/0007_s3htm.

（注12） また，この“トロイカ”の政治的な見解を代弁する人物として，シャルア外務大臣が挙げられ，アドナーン・バドル・ハサン（ʻAdnān Badr Ḥasan）政治治安部長とともに重要な地位を占めていると報告されている。 http://www.free-lebanon.com/LFPNews/Assad/assad.html を参照。

（注13） *Al-Ḥayāh,* July 27, 2001.

（注14） *Liberation* (Paris), November 29, 1999; Interview, Anonymous, Latakia, November 22, 1999; http://www.meib.org/articles/0008_sd1.htm; http://www.meib.org/articles/0007_sd1.htm.

（注15） Ḥ・アサド前大統領の生前には，核廃棄物の密輸とシリア砂漠への投棄を画策したジャマール・ハッダーム（Jamāl Khaddām:ハッダーム副大統領の長男）や，組織的な自動車盗難を指揮していたムハンマド・ドゥーバー（Muḥammad Dūbā: ドゥーバー前軍事情報局長の息子）らが処罰された。*Al-Ḥayāh,* July 3, 7, 2000; Interview, Anonymous, Damascus, June 19,2000; http://www.meib.org/articles/0007_sd1. htm;http://www.meib.org/articles/1002_me5.htmを参照。

（注16） Ｂ・アサド大統領への権力移譲においてトゥラース国防大臣がきわめて重要な役割を担っていたことに関して，『アル＝ワタン・アル＝アラビー』*(Al-Waṭan al-ʻArabī)* 誌は次のような逸話を紹介している。「彼［Ḥ・アサド前大統領］は死の直前，［トゥラース］国防大臣の手を取り，息子の手の上にのせ，こう指示した。『これが君への遺言だ。この手を守れ』」。こう述べたのち，Ḥ・アサド前大統領はトゥラース国防大臣に，⑴政情混乱を招きかねない性急な「腐敗との闘い」の猶予，⑵Ｂ・アサド大統領とは不仲であるが内政や対レバノン政策で豊富な経験をもつハッダーム副大統領の留任，そして⑶ドゥーバー前軍事情報局長を支持する軍・ムハーバラート幹部たちへの配慮，を命じたという。“Mā lam Yanshur ʻan al-Muʾtamar al-Quṭrī al-Tāsiʻ: Naṣāʾiḥ Abī Firās ilā al-Raʾīs al-Ibn［第９回地域大会について明かされなかったこと：新大統領へのアブー・フィラースの忠告］,” *Al-Waṭan al-ʻArabī,* No. 1217, June 30, 2000, p. 27を参照。

（注17） 1975年に英国で生まれたアスマーは，英国で初等・中等教育を受けたのち，1997年にロンドン大学キングス・カレッジ (King's College) でコンピュータ科学の学士号を取得し，ドイツ銀行，J・P・モ

ーガンに勤めた。1990年代初めにロンドン留学中のB・アサド大統領と知り合った彼女は，2000年夏に結婚を承諾し，同年7月に退職するとともに，ハーヴァード大学大学院への進学を断念した。

（注18） ロンドン郊外のアクトン (Acton) で心臓外科医を開業しているアスマーの父ファウワーズ・アル＝アフラス (Fawwāz al-Akhras) は，ヒムスのスンニー派名望家の出で，在ロンドン・シリア大使館職員である母スィフル・アル＝アトリー (Siḥr al-ʻAṭrī) はアレッポのスンニー派名望家の出である。なお，スィフルの姉は，アドナーン・ダッバーグ (ʻAdnān Dabbāgh) 元総合情報部長（在任：1970〜1977年）の妻である。

（注19） B・アサド大統領とアスマーの結婚については，*Al-Ḥayāh,* December 6, 2000; January 4, 15, 2001; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* January 3, 2001; *Tishrīn,* January 2, 2001; Interview, Anonymous, Damascus, January 10, 2001を参照。なお，Ḥ・アサド前政権の基盤がシリア中北部で脆弱だったことは，1970年代後半から1980年代にかけてのムスリム同胞団の抵抗運動が，ハマー，アレッポなどでもっとも大規模に展開したことから窺い知ることができる。

（注20） Interview, Anonymous, Damascus, September 25, 2000.

（注21） ハッダーム副大統領“粛清”の噂は，不正疑惑のかけられたシハービー前参謀総長が前立腺ガン治療のためベイルート経由で渡米する際に，彼がベイルート国際空港まで同伴したことで，信憑性を帯びた。

（注22） *Al-Ḥayāh,* June 21, August 6, 19, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* July 11, 30, 2000; *Tishrīn,* August 6, 2000.

（注23） Interview, Anonymous, Damascus, November 1, 2000.

（注24） とりわけ，ドゥーバー前軍事情報局長は，軍とムハーバラートの双方に多数の支持者を擁しているとされ，そのなかには，ハサン政治治安部長，アリー・ハビーブ (ʻAlī Ḥabīb) 特殊部隊 (Al-Waḥdāt al-Khāṣṣah) 隊長らが含まれると言われる。

（注25） シリア政治において“左派”とは，アラブ民族主義，社会主義，共産主義（マルクス主義）をさす。

（注26） Interview, Anonymous, Damascus, June 19, 2000.

（注27） 本稿で取り上げた政策以外にも，B・アサド大統領は，大学・省庁付属の研究所の設立，大学・師範学校の再編，海外に留学する学生に対する兵役免除，公務員給与・年金の引き上げ，輸入車両の免税引き下げ，自由区域でのレバノンの民間銀行の開設，民間銀行の設立許可，国有地の農民への分配などといった措置を講じた。*Al-Ḥayāh,* July 10, 20, August 9, 10, 21, 25, 27, December 3, 5, 7, 8, 12, 2000, January 15, 17, 2001; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* July 30, 31, August 9, December 3, 2000, January 17, 2001; *Tishrīn,* July 23, 30, August 1, 3, 6, 27, 30, September 10, 24, December 3, 4, 5, 10, 11, 12, 2000, January 17, 2001を参照。

（注28） *Al-Ḥayāh,* July 14, August 7, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* July 12, 2000. 大統領賛美の自粛は当初徹底していたが，次第にB・アサド大統領の写真やポスターが再び目につくようになった。それだけでなく，ムハーバラートや軍のなかに，マーヒル大佐の写真を掲げる者も現れるようになった。

（注29） *Al-Ḥayāh,* July 14, August 7, 11, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* July 12, 27, 2000.

（注30） Lisa Wedeen, *Ambiguities of Domination: Politics, Rhetric, and Symbols in Contemporary Syria* (Chicago & London: The University of Chicago Press, 1999) を参照。

（注31） *Al-Baʻth,* July 18, 2000.

（注32） また，進歩国民戦線は宗教政党や地域主義政党の結成・加盟に反対している『進歩国民戦線憲章』(*Mīthāq al-Jabhah al-Waṭanīyah al-Taqaddumīyah*) の改正を議論し，シリア民族社会党 (Al-Ḥizb al-Sūrī al-Qawmī al-Ijtimāʻī) の加盟を検討したが，同党指導部がシリアに存在しないことを口実に，この問題を棚上げにした。

（注33） *Al-Ḥayāh,* June 19, August 6, 29, September 6, October 8, 2000, January 5, 15, June 8, 17, 18, 19, 2001; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* August 1, 2, 5, 6, 23, September 4, November 30, 2000, January 31, 2001; *Tishrīn,* August 6, November 30, 2000.

（注34） http://www.ikhwan - muslimoon - syria.org/

bayanat/release.htm.

（注35） この恩赦の半年後の2001年５月６日，シリア人権擁護諸委員会メンバーでジャーナリストのニザール・ナイユーフ (Nizār Nayyūf) が９年間の投獄の末（1992年逮捕），釈放された。*Al-Ḥayāh,* May 8, 29, June 22, 23, 25, 29, 2001を参照。

（注36） 2000年11月22日の法律17号の全文は以下の通り。

共和国大統領は，憲法の裁定およびヒジュラ暦1421年８月24日，西暦2000年11月21日の人民議会決議に従い，以下の通り発令する。

第１条　2000年11月16日以前の罪状への恩赦を以下の通り実施する。ⓐ1974年の修正法第49号第10条が規定する罪状に対するすべての処罰。ⓑすべての軽犯罪への処罰。ⓒ軍事処罰法第100条が規定する国内逃亡罪に対するすべての処罰。本法令発布後60日以内に出頭しない逃亡者については，本項を適用しない。ⓓ以下の処罰：⑴1953年１月５日の修正立法令第115号により発令された徴兵法第56, 57, 60, 70条が規定する違反，⑵その他の諸規定による違反。ⓔ軽犯罪に関する改訂措置および監察処分。ⓕ：⑴1973年２月15日の修正立法令第13号が規定する密輸入に対するすべての処罰，⑵上項の裁定は以下を除く。麻薬，および関係当局への武器による抵抗を伴った密輸入罪。ⓖ1986年８月31日の修正立法令第24号，2000年４月22日の立法令第６号，1966年５月16日の修正立法令第37号により発令された経済処罰法第15，23，24条が規定する罪状に対するすべての処罰。ⓗ経済処罰法が規定するそのほかの重罪に対する処罰の３分の１。ⓘ本法令発令後１年以内に供託者への返済がなされた場合，1994年６月20日の法令第８号が規定する罪状に対するすべての処罰。

第２条　本法は以下を除く。ⓐ1961年の法律第10号が規定する罪状。ⓑ以下の条項が規定する軽犯罪：⑴一般処罰法第345～349条，第351～356条，第358条～362条，第365～367条，第397条，第405条，第428条，第435条，第441条，第450～461条，第376条，第500条，第504～505条，第507～527条，第628～632条，第635～636条，第641～644条，第652～653条，第656～659条，⑵1950年修正立法令第61号が規定する軍事処罰法第112, 113, 120, 133, 135, 140, 149条。ⓒ関税，印紙，たばこ，建築基準などに関する制度および法律への違反に対する処罰は，国家および公的機関に対する民間補償に応じて行われる。ⓓ本法第２条ⓑが規定する例外事項は，2000年４月３日の法律第２号第５条が定める民間人および被告人に対する軽犯罪処罰を含まず，本法第１条ⓑが規定する恩赦に基づき行う。

第３条　本法発令より３ヶ月以内に関係当局に出頭しない場合，本法がその処罰を定める重犯罪を犯した逃亡者への恩赦は実施しない。

第４条　ⓐ本法第１条ⓔおよびⓖが規定する罪状に対する処罰が執行，ないしは執行予定の場合，恩赦は行わず，既に施行された措置と決定に対する恩赦も行わない。ⓑ本恩赦が含む罪状への処罰は，国庫への支払いが終了していない場合，返済されない。

第５条　本恩赦は個人の権利申立の影響は受けない。権利申立は明確な処罰に関するものであり，公的な権利に帰する。また被告個人は，本法廷に本法律発令より６度申立を行うと，刑事法廷の前で権利を失い，民事法廷の前でその権利を行使し得るのみとなる。

第６条　本法は官報において公刊され，発令日をもって施行されるものとする。

ダマスカス，ヒジュラ暦1421年８月25日 / 西暦2000年11月22日，共和国大統領バッシャール・アル＝アサド。*Al-Thawrah,* November 23, 2000より全文翻訳。

（注37） 1990年代の恩赦については，青山弘之「もう一つの和平交渉?!：1990年代のアル＝アサド政権とシリア・ムスリム同胞団」（『現代の中東』第25号，1998年９月）22～23ページ；青山弘之「政治の多元化か独裁の再生産か：1990年代半ば以降のシリアにおける支配の論理」（『現代の中東』第28号，2000年３月）34～35ページを参照。

（注38） 青山「政治の多元化か独裁の再生産か」44～45ページ。

（注39） *Al-Ḥayāh,* November 22, December 1, 7, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* November 21, 2000; *Tishrīn,* November 30, 2000. また2001年８月末には，タドムル刑務所閉鎖が報道された。Reuters, October 12, 2001を参照。

（注40） *Al-Ḥayāh,* November 22, 2000.

（注41） 2000年９月末から10月末にかけて，バアス党の支部で人事改編が行われ，9月から12月にかけて，十数名におよぶ大使が新規に在外公館へ派遣され，10月から2001年２月にかけて，主要各県の知事が交替したが，世代交代が政府・党・軍の中枢において行われることはなかった。*Al-Ḥayāh,* September 6, 16, 29, October 31, 2000; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* September 4, October 16, 31, December 24, 2000などを参照。

（注42） 2000年７月から2001年４月末にかけての有識者たちの活動については，青山弘之「シリアにおける反政府勢力の挑戦と挫折：バッシャール・アル＝アサド政権発足１年を振り返って」『海外事情』第49巻第７号，2001年７-８月，34～49ページで詳しく論じた。本節では，この論文を踏まえ，2001年末までのB・アサド政権と有識者たちの対決のありようを明らかにする。

（注43） *Al-Baʿth,* July 18, 2000.

（注44） 『99人声明』全文については，*Al-Nahār* (Beirut), Supplement, September 3, 2000を参照。

（注45） Interview, Anonymous, Damascus, January 20, 2001.

（注46） 『基本文書』全文については，*Al-Ḥayāh,* January 12, 2001を参照。

（注47） 「結成委員会」は，キールー，ダリーラ，イード，ジャバーイー，アズム，ブンニー，ナビール・アル＝マーリフ（Nabīl al-Māliḥ：演劇監督），ムハンマド・カールサリー（Muḥammad Qārṣalī：映画監督），アーディル・マフムード（ʿĀdil Maḥmūd：詩人），ヤースィーン・シュクル（Yāsīn Shukr：研究者），ムハンマド・ナジャーディー・タイヤーラ（Muḥammad Najātī Ṭayyārah：研究者），ユースフ・サルマーン（Yūsuf Salmān：翻訳家），リファアト・アル＝スユーフィー（Rifaʿat al-Suyūfī：技師），カースィム・アザーウィー（Qāsim ʿAzāwī：詩人），ハイリー・アル＝ザハビー（Khayrī al-Dhahabī），ザイナブ・ヌトファジー（Zaynab Nuṭfah-jī）によって構成された。

（注48） 「学問・研究委員会」は，キールーが首座を務めた。

（注49） 「消費者権利協会」は，ダリーラが首座を務めた。

（注50） *Al-Ḥayāh,* January 14, 2001.

（注51） ガルユーンが『基本文書』を「エリート主義的」と批判したのを皮切りに，アッバース，ムハンマド・カーミル・アル＝ハティーブ（Muḥammad Kāmil al-Khaṭīb: 研究者），ムハンマド・シャフルール（Muḥammad Shaḥrūr：ダマスカス大学教授），アブド・アル＝アズィーズ・アルーン（ʿAbd al-ʿAzīz ʿAlūn），バースィル・カグドゥー（Bāsil Kaghdī）らが，政治的色彩を強める「結成委員会」と袂を分かっていった。

（注52） *Al-Ḥayāh,* January 30, 2001.

（注53） 事態を憂慮した「結成委員会」は，２月20日と21日に会合を開き，当局の強硬姿勢への対応を協議したが，この場で有識者どうしの足並みの乱れが生じた。２月20日の会合で新たな声明の発表を力説したキールーに「結成委員会」の他のメンバーが反対した結果，翌21日，キールーは脱会を宣言したのである。キールーと他のメンバーの対立は３月末に収束し，結成委員会は４月15日に『国民総合意』（*Tawāfuqāt Waṭanīyah ʿĀmmah*）を発表し，その存在を誇示しようとしたが，勢力を回復することはなかった。なお，『国民総合意』全文については，*Al-Ḥayāh,* April 16, 2001を参照。

（注54） 日本国際問題研究所（編）『中東諸国における民主化と政党・政治組織の研究』（日本国際問題研究所，1997年）105～119ページ。

（注55） Ḥassān ʿAbbās, *Wāqiʿ al-Ṣaḥāfah al-Sūrīyah*［シリアにおけるジャーナリズムの現状］(paper presented at the meeting of Muntadā Jamāl al-Atāsī lil-Ḥiwār al-Dīmuqrāṭī, Damascus, June 3, 2001); *Al-Ḥayāh,* June 8, 2001.

（注56） Riyāḍ al-Turk, *Masār al-Dīmuqrāṭīyah wa-Āfāq-hā fī Sūrīyah*［シリアにおける民主主義の道のりとその行方］(paper presented at the meeting of Muntadā Jamāl al-Atāsī lil-Ḥiwār al-Dīmuqrāṭī, Damascus, August 5, 2001) in *Al-Ḥayāh,* August 8, 9, 2001. なお，トゥルクについては，青山弘之「シリアの抵抗運動」（『季刊アラブ』第99号，2001年冬）22～24ページを参照。

（注57） このハンストは，8月５日に，1992年と1995年にヒムスィーが購入した輸入車製品への関税約

100万ドルの追徴を司法当局が求めたことに対する抗議行動でもあった。これに対し，当局は「憲法の侮辱，体制への敵対，外国勢力への情報提供」の容疑でヒムスィーを逮捕し，アドラー（ʻAdrā）刑務所に投獄した。*Al-Ḥayāh,* August 8, 10, 11, 13, 2001; *Al-Zamān* (London), August 7, 2001; *Al-Raʼy al-ʻĀmm* (Kuwait), August 12, 2001を参照。

（注58） ヒムスィーの逮捕に対し，国民民主主義連合のイーサー，共産主義行動党のアブド・アル＝カリーム，人民議会議員のサイフ，マクディスィー，キールー，シャフルール，そしてM・Kh・ハティーブといった有識者たちが，単独ないしは連名で釈放を要求し，B・アサド政権に抗議した。*Al-Ḥayāh,* August 14, 2001を参照。

（注59） *Al-Ḥayāh,* September 1,5, 9, 2001; Al-Jazīrah, September 1, 2001; *Al-Sharq al-Awsaṭ,* September 3, 2001.

（注60） この会議では，ガルユーンが「シリアにおける改革と変革の未来」(Mustaqbal al-Iṣlāḥ wa-al-Taghyīr fī Sūrīyah)と題する講演を行った。*Al-Ḥayāh,* September 7, 2001を参照。

（注61） また，有識者216名が連名で声明を発表し，トゥルクとヒムスィーの釈放を要求した。*Al-Ḥayāh,* September 3, 4, 2001; Al-Zamān, September 2, 2001; http://www.ikhwan-muslimoon-syria.org/bayanat/bayanat.htm. を参照。

（注62） サイフは9月7日付『アル＝サウラ』で，その活動が「改革，自由，民主主義の障害」と批判され，また逮捕の直前には，彼を初めとする他の人民議会議員の脱税容疑がとりざたされた。*Al-Ḥayāh,* August 18, September 8, 2001; *Al-Thawrah,* September 7, 2001を参照。

（注63） イーサーは，サイフの顧問弁護人を務めていた。

（注64） *Al-Dustūr* (Amman), October 15, 2001; *Al-Ḥayāh,* September 9, 10, 13, 27, 2001; *Al-Zamān,* October 15, 2001.

（注65） *Al-Ḥayāh,* June 21, 2000.

（注66） 青山「政治の多元化か独裁の再生産か」44～45ページ。

（あおやま ひろゆき／地域研究第2部）